

『太平広記』 訳注

— 卷四百二十五「龍」八 —

太平広記読書会

本稿は前稿「『太平広記』 訳注 — 卷四百二十四「龍」七 —」
（『国語国文学研究』第五十四号二〇一三年）に続き、『太平広

記』の卷四百二十五に収められた二十一話の訳注である。『太平広記』は北宋の初めに編纂された小説を集めた類書である。本書は日本の説話文学に影響を与えたことでも知られており、その訳注を行うことは今後の中国文学・日本文学双方の研究に資するところが大きいと考える。なお本巻の後半十三話は、「龍」の下位分類として「蛟」の項目が附せられている。

またこれは平成十七年七月十四日より始まった『太平広記』読書会の成果の一部でもある。当読書会は熊本大学所属の教員を中心に、他大学の教員や学生、社会人など、所属の枠にとらわれず広く集まった有志による会であり、今後も『太平広記』を読み進めていく予定である。

先に記した通り、当研究会は新型コロナウイルスの世界的大流行を受けて令和二年一月三十日開催の第二百十三回をもって休会を余儀なくされていたが、令和五年十月十六日、三年半ぶ

りに活動を再開した。今後も細々ながら活動を継続していきたくと考えている。

底本、参考文献、及び字体については「『太平広記』 訳注 — 卷四百十八「龍」一（上） —」（『国語国文学研究』第四十三号二〇〇八年）、「『太平広記』 訳注 — 卷四百二十一「龍」三（下） —」（『国語国文学研究』第四十八号二〇一三年）及び前号に記した通りである。作品番号は前稿の続きとする。

なお本稿を以て十六年に渡った「龍」部の訳注は完了となる。長きにわたって連載の機会を与えていただいた熊本大学文学部国語国文学会には厚く感謝申し上げます。

◇「龍」

○74 「張温」

〔本文〕

王蜀時、梓州有張温者好捕魚。曾作客館鎮將。夏中、携賓觀

魚、偶遊近龍潭之下。熱甚、志不快。自入水學網、獲一魚長尺許。鬐鱗如金、撥刺不已。俯岸人皆異之。遂逡晦暝、風雨驟作。温惶駭、奔走數里、依然列景。

或曰、「所獲金魚、即潭龍也。是知龍爲魚服、自貽其患。苟無風雨之變、亦難逃鼎俎矣。龍潭取魚、亦宜戒慎。」(出『北夢瑣言』)

〔訓読〕

王蜀の時、梓州に張温なる者有り、好みて魚を捕らふ。曾て客館の鎮將と作る。夏中、賓を携へて魚を観るに、偶たま遊びて竜潭の下に近し。熱きこと甚だしく、志快からず。自ら水に入りて網を拵ぐるに、一魚の長尺許なるを獲。鬐鱗金の如く、撥刺として已まず。岸に俯せし人、皆之を異とす。遂巡にして晦暝し、風雨驟かに作る。温惶駭し、奔走すること數里、依然として列景あり。

或るひと曰く、「獲る所の金魚は、即ち潭竜なり。是竜魚服を為し、自ら其の患ひを貽るを知る。苟くも風雨の変無かりせば、亦た鼎俎を逃れ難からん。竜潭に魚を取るは、亦た宜しく戒慎すべし」と。

〔語注〕

○王蜀 五代十国の一つ、前蜀(八九一〜九二五)のこと。王を姓とするので、王蜀という。西川節度使王建が東川、山南西道、荆南の一部を確保、天祐四年(九〇七)の唐滅亡の折には檄を飛ばして諸勢力を糾合しようとしたが応ずる者無く、自ら

帝位について国号を蜀とした。後主王衍の時、後唐莊宗に滅ぼされる。○梓州 現在の四川省三台県一带。○張温 未詳。正史には見えない。○客館 賓客を置くところ。また宿屋。○鎮將 地方軍隊の長。ここでは宿屋の用心棒のようなものか。○鬐鱗 「鬐」は背びれ、「鱗」はうろこ。○撥刺 魚の跳ね上がる音の様。○魚服 魚でない者が魚の恰好をすること。尊者が貧者の服装をすることを言う。張衡「東京賦」(『文選』卷三)に「白龍魚服、見困豫且。」(白竜魚服し、予且に困しめらる。)とあり、薛綜注に「説苑」曰、呉王欲從民飲。伍子胥曰、昔白龍下清冷之淵、化爲魚、豫且射中目。白龍不化、豫且不射。君今棄萬乘之位、而從於臣、恐有豫且之患。」(『説苑』に曰く、呉王 民の飲に從はんと欲す。伍子胥曰く、「昔白竜 清冷の淵に下り、化して魚と爲り、予且 射て目に中つ。白竜 化せざれば、予且 射ず。君今 万乗の位を棄て、而して臣に從はば、恐らくは予且の患有らん」と。)とある。○自貽其患 この話のように自分で自分を害する訳ではないが、仏典にはしばしば竜が生来苦しみを受け続ける存在であると記されている。例えば般若流支訳『正法念処經』卷十八「畜生品」(大正藏七二二)に「知此衆生、於人中時、愚癡之人、以瞋恚心、焚燒僧房、聚落城邑。如是惡人、身壞命終、墮於地獄、受無量苦。從地獄出、生於龍中。以前世時以火燒人村落僧房、以是因緣受畜生身、熱沙所燒。」(知る此の衆生、人中の時に於いて、愚痴の人、瞋恚の心を以て、僧房、聚落城邑を焚燒す。是の如き惡人、身壞

れ命終はれば、地獄に墮ち、無量の苦を受く。地獄より出づれば、竜中に生ず。前世の時火を以て人の村落僧房を焼くを以て、是の因縁を以て畜生の身を受け、熱沙の焼く所となる。とある。屋敷信晴「六朝・唐代龍類小説と仏教——「俱名国」と「柳毅伝」をめぐって——」（富永一登先生退休記念論集 中国古典テクストとの対話」研文出版二〇一五年）を参照。○鼎俎 かなえとまな板。料理すること。○『北夢瑣言』二十卷。宋の孫光憲の撰。主として唐宋、五代の軼事を載せている。北夢の称は光憲が初め高季興に従って荊州夢沢の北にいたのによっている。この話は現行の二十巻には無く、民国の繆荃孫が補った『北夢瑣言逸文』巻四に収められている。

〔訳文〕

前蜀の時、梓州に魚を捕るのが好きな張温という者がいた。かつて宿屋の用心棒をしていた時、夏に客と一緒に魚を見に行つて、たまたま竜潭のほとりにやつて来た。とても暑くて、気分が悪かった。張温が自ら淵に入つて網を引き上げると、一尺（三一・一cm）くらいのおおきさの魚が入つていた。背びれと鱗は金色をしていて、ぴちぴちと跳ね続けていた。岸に伏せていた人々は皆不思議だと思つた。しばらくすると辺りは真っ暗になり、風や雨が急に起こつた。張温が驚いて何里（一里＝五五九・八m）か走つて逃げると、もとのまま強い日差しが降り注いでいた。

ある人の話では、「捕まえた金色の魚は、潭の竜である。こ

れは竜が魚の格好をして、自らを苦しめていたのだということに分かる。もし風雨の異変が起ころなかつたら、竜は厨房行きは免れ難かつただろう。竜潭で魚を取るのは戒めた方が良かったらう。」とのことだった。

○75 「郭彦郎」

〔本文〕

世言乖龍苦於行雨、而多竄匿、爲雷神捕之。或在古木及檻柱之内。若曠野之間、無處逃匿、即入牛角或牧童之身。往往爲此物所累而震死也。

蜀郎有軍（軍原作青。據明鈔本、陳校本改。）將郭彦郎者。行舟俠江、至羅雲漑。方食而臥、心神恍惚如夢、見一黃衣人曰、「莫錯。」而於口中探得一物而去。覺來、但覺咽喉中痛。於時篙工輩但見船上雷電晦暝、震聲甚厲。斯則乖龍入口也。

南山宣律師、乖龍入中指節、又非虛說。所以孔聖之言、「迅雷風烈必變。」可不敬之乎。（出『北夢瑣言』）

〔訓読〕

世に言ふ乖龍（くわいりゆう）行雨に苦しみ、而して多く竄匿するも、雷神の之を捕ふるところと爲る。或いは古木及び檻柱の内に在り。曠野の間の若きは、処として逃匿する無くんば、即ち牛角或いは牧童の身に入る。往往にして此の物の累（つら）はす所と爲りて震死するなり。

蜀郎に軍將郭彦郎なる者有り。舟を俠江に行かしめ、羅雲

漑に至る。方に食して臥するに、心神恍惚として夢みるが如く、一黄衣人を見るに曰く、「錯たがふ莫からん」と。而して口中に於いて探りて一物を得て去る。覺めて来、但このかただ咽喉の中の痛きを覚ゆるのみ。時に於いて篙工の輩。但このかただ船上に雷電ありて晦暝し、震声の甚はげだ厲はげしきを見るのみ。斯これ則ち乖竜口に入るなり。

南山の宣律師、乖竜 中指節に入るは、又た虚説に非ず。所以に孔聖の言に、「迅雷風烈には必ず変ず」と。之を敬はざるべけんや。

〔語注〕

○乖龍 災いをもたらす竜。雷に追われて物の中に隠れるという。白居易「偶然二首」其二「白居易詩集校注」卷十六に「乖龍藏在牛領中、雷擊龍來牛枉死。」(乖竜 藏かくれて牛の領中に在り、雷竜を撃ち来りて牛枉死す。)とある。○震死 雷に打たれて死ぬこと。「震」は雷の意。『毛詩』小雅「十月之交」に「燂燂震電、不寧不令。」(燂燂たる震電、寧やすからず 令よからず。)とあり、毛伝に「燂燂、震電貌。震、雷也。」(燂燂、震電の貌。震、雷なり。)とある。○蜀邸 「邸」は王侯の私邸や役所のこと。ここで具体的にどこを指すのかは未詳。或いは「蜀郡」の誤りか。蜀郡は現在の四川省成都市一帯。○郭彦郎 未詳。正史には見えない。○侠江 未詳。近い地名としては、嘉州北部、峨嵋山の近くに夾江県がある。現在の四川省樂山市夾江県。川の名前としては、俠河という川が現在の河北省涿州

市の西を流れているが、全く場所が異なる。『水経注』「聖水注」に「聖水又南、與樂水合。水出縣西北大防山南、東南流、歷縣西而東南流注聖水。…(中略)…又東與俠河合。」(聖水 又た南し、樂水と合す。水泉の西北の大防山の南より出で、東南流し、泉の西を歴て南流して聖水に注ぐ。…(中略)…又た東して俠河と合す。)とある。○羅雲漑 未詳。「漑」はそそぐの意。ここでは灌溉用の水路のようなものか。○篙工 舟竿を扱う船員。船頭、水夫。○南山 各地にあるが、ここでは終南山のこと。現在の陝西省西安市の南南西に在る名山。唐の都長安に近いことから、文人達が遊ぶ場所であると共に、隱者の住まう所として知られた。○宣律師 僧侶の名。釈道宣(五九六～六六七)のこと。『宋高僧伝』卷十四「唐京兆西明寺道宣伝」によれば、俗姓は錢、丹徒、或いは長城の人。二十歳の時、大禪定寺の智首律師から具足戒を受け律を学んだ。その後、終南山を拠点として諸律の異伝を求め諸方を巡った。『四分律刪繁補闕行事鈔』『統高僧伝』『広弘明集』など多くの著がある。同じく終南山にいた道士孫思邈と親しく、しばしば議論を行っていたという。『宣室志』卷七に、ある日道宣がいる建物の周りを雷がぐるぐる飛び回ることがあった。道宣は蛟に取り憑かれたのかと思ひ指の爪を見ると、右手の小指の爪にゴマのような黒い点があった。そこで指先を壁の穴から外に出したところ、大きな音がして指が半分無くなった、という話があり、そこに「黒點、是蛟龍之藏處也。」(黒点は、是蛟竜の藏れし処なり。)

とある。○孔聖之言迅雷風烈必變 孔子が、天候が荒れている際には居住まいを正して天に敬意を示さなければならぬと述べたことをいう。『論語』「郷党」篇に「有盛饌、必變色而作。迅雷風烈必變。」（盛饌有らば、必ず色を変じて作つ。迅雷風烈には必ず変ず。）とあり、邢昺疏に「迅雷風烈必變者、迅、急疾也。風疾雷爲烈。此陰陽氣激爲天之怒、故孔子必變容以敬之也。」（迅雷風烈には必ず変ず）なる者は、迅は、急疾なり。風疾くして雷あるを烈と爲す。此陰陽の気の激しきを天の怒りと爲し、故に孔子必ず容を変じて以て之を敬ふなり。）とある。○『北夢瑣言』 宋の孫光憲の撰。もと三十卷であったらしいが、現行本は二十卷。主として唐宋、五代の軼事載せている。北夢の称は光憲が初め高季興に従つて荊州夢沢の北にいたのによつていふ。この話は現行の二十卷には無く、民国の繆荃孫が補つた『北夢瑣言逸文』巻四に収められている。

〔訳文〕

世間で語られていることによると、垂竜は雨が苦手で隠れることが多いが、雷神に捕まえられてしまう。古い木や建物の欄干、柱の中に隠れるのだが、何も無い野原のようなどころはどこにも隠れるところが無いので、牛の角や牧童の身体の中に入つてしまい、身体に入られたものはしばしばこの垂竜のせいで雷に打たれて死ぬことになる。

蜀の役所に郭彦郎という将校がいた。舟で侠江に赴き、羅雲漚にたどりついた。ちょうど食事を終えて横になつていたところ

ろ、頭がぼんやりして夢を見ているようになった。黄色の衣を着た人が現れ、「間違ひ無かるう。」と言ひ、郭彦郎の口の中から何かを探り取つて行つた。郭彦郎は目を覚ますと、喉の痛みを感じただけだった。その時水夫達は船の上に雷が閃いて真つ暗になり、激しい音が鳴り響くのを見るばかりであった。これは垂竜が口に入ったのである。

南山の宣律師の中指の関節に垂竜が入つたというのは、虚妄ではない。だから孔子の言葉に「突然の雷や激しい風の際には必ず居住まいを正さねばならない。」とあるのである。敬わぬい訳にいくだろうか。

○76 「王宗郎」

〔本文〕

蜀庚午歳、金州刺史王宗郎奏洵陽縣洵水畔有青煙廟。數日、廟上煙雲昏晦、晝夜奏樂。忽一旦、水波騰躍、有群龍出於水上、行入漢江。大者數丈、小者丈餘。如五方之色、有如牛馬驢羊之形。大小五十、累累接跡。行入漢江、却過廟所、往復數里。或隱或見、三日乃止。（出『録異記』）

〔訓読〕

蜀庚午の歳、金州刺史王宗郎 奏す 洵陽県洵水の畔に青煙廟有り。數日、廟上に煙雲ありて昏晦し、晝夜 樂を奏す。忽ち一旦、水波 騰躍し、群竜有りて水上に出で、行きて漢江に入る。大なる者は數丈、小なる者は丈余。五方の色の如く、牛馬

驢羊の形の如き有り。大小五十、累累として跡を接す。行き漢江に入り、却しりぞきて廟所みやどころに過ぎり、往復すること数里。或いは隠れ或いは見れあは、三日にして乃ち止む。

〔語注〕

○蜀庚午歲 ここていう「蜀」は五代十国の一つ、前蜀（八九一〜九二五）のこと。西川節度使王建が東川、山南西道、荊南の一部を確保、天祐四年（九〇七）の唐滅亡の折には檄を飛ばして諸勢力を糾合しようとしたが応ずる者無く、自ら帝位について国号を蜀とした。後主王衍の時、後唐莊宗に滅ばされた。前蜀の「庚午歲」は武成三年（九一〇）に当たる。○金州 現在の陝西省安康市一帯。○王宗郎 「王宗朗」のことか。『資治通鑑』卷二百六十五「唐紀・昭宣帝」に天祐二年（九〇五）の記事として「王宗賀等攻馮行襲、所向皆捷。丙子、行襲棄金州、奔均州。其將全師朗以城降。王建更師朗姓名曰王宗朗、補金州觀察使、割渠、巴、開三州以隸之。」（王宗賀等 馮行襲を攻め、向かふ所 皆捷つ。丙子、行襲 金州を棄て、均州に奔る。其の將全師朗 城を以て降る。王建 師朗の姓名を更あらためて王宗朗と曰はしめ、金州觀察使に補ひ、渠、巴、開三州を割きて以て之を隸せしむ。）とある。○洵陽縣 現在の陝西省旬陽市附近。○洵水 川の名。現在の秦嶺山脈の南から南流し、旬陽市附近で漢水に流れ込む。『山海經』「南山經」に「又東四百里曰洵山。其陽多金、其陰多玉。…（中略）…洵水出焉、而南流注于閼之澤。」（又た東四百里を洵山と曰ふ。其の陽に金多く、其

の陰に玉多し。…（中略）…洵水焉こゝに出で、而して南流して閼あつの沢に注ぐ。）とある。○青煙廟 未詳。○漢江 漢水のこと。長江最大の支流。陝西省に発し、湖北省襄陽、沔陽を経て武漢市で長江と合流する。○『録異記』 前蜀・杜光庭撰。『崇文總目』等によればもと十巻であったようだが、現在の通行本は八巻しか残っていない。現行本は百三十七話を内容別に分類し、巻一は「仙」、巻二は「異人」、巻三は「忠」「感応」「異夢」、巻四は「鬼神」、巻五は「竜」「異虎」「異龜」「異蛇」「異魚」、巻六は「洞」、巻七は「異水」「異石」、巻八は「墓」を収録している。この話は通行本の巻五「竜」に収められている。

〔訳文〕

前蜀の庚午の年（九一〇）、金州刺史の王宗郎が次のように奏上した。洵陽県洵水のほとりに青煙廟があるのだが、数日の間、廟のあたりに煙雲が立ちこめて真つ暗になり、昼も夜も音楽が聞こえてきた。ある朝突然、波が沸き立ち、竜の群れが川岸に現れ、漢水に入っていた。大きいものは数丈（一丈≒三・一一m）、小さいものは一丈余りあった。五方に配当された色（青・白・赤・黒・黄）のような色をしていて、牛や馬、驢馬、羊のような姿をしていた。大小五十頭ほどがずらずらと列をなした。漢水に入るとまた廟に戻ってきて、数里（一里≒五五九八m）の間を行ったり来たりしていた。姿を隠したり現したりしていたが、三日経つとやっと終わった。

○77 「犀浦龍」

〔本文〕

癸酉年、犀浦界田中有小龍青黑色、割爲兩片。旬日臭敗、尋亦失去。

摩訶池大廳西面亦有龍井、甚靈。人不可犯。(出『録異記』)

〔訓読〕

癸酉の年、犀浦の界の田中に小竜の青黑色なる有り、割かれ
て兩片と爲る。旬日にして臭敗し、尋いで亦た失去す。

摩訶池の大庁の西面に亦た竜井有り、甚だ靈あり。人犯す
べからず。

〔語注〕

○癸酉年 『録異記』が著された前蜀の「癸酉年」は永平三年
(九一三)に当たる。○犀浦 県名。現在の成都市郫都区附近。

かつて蜀の太守李冰が犀の石像を五体作つて川に沈め、怪異を
鎮めたという。『元和郡県図志』卷三十一「劍南道上・成都府」
に「犀浦縣、本成都縣之界。垂拱二年分置犀浦縣。昔蜀守李冰
造五石犀、沈之於水、以厭怪。因取其事爲名。」(犀浦県、本
成都県の界。垂拱二年分ちて犀浦県を置く。昔蜀守李冰五
石犀を造り、之を水に沈め、以て怪を厭す。因りて其の事を取
りて名と爲す。)とある。○摩訶池 「摩訶池」に同じ。成都
にあった池の名。汗池ともいう。『元和郡県図志』卷三十一「劍
南道上・成都府」に「摩訶池、在州中城内。」(摩訶池は、州中
城内に在り。)とある。盧求『成都記』(『読史方輿紀要』卷六

十七「成都府」引)に、「池在張儀子城内。隋蜀王秀取土築廣
子城、因爲池。有胡僧見之、曰、摩訶宮毘羅。胡語謂摩訶爲大、
宮毘羅爲龍。言此池廣大有龍也。」(池は張儀の子城内に在り。
隋の蜀王秀土を取りて子城を築広し、因りて池と爲す。胡僧
有りて之を見、曰く、「摩訶宮毘羅あり」と。胡語に摩訶を謂
ひて大と爲し、宮毘羅を竜と爲す。此の池の廣大にして竜有る
を言ふなり。)とある。また『太平寰宇記』卷七十二「劍南道・
益州・華陽県」に「汗池、一名摩訶池。昔蕭摩訶所置、在錦城
西。」(汗池、一名摩訶池。昔蕭摩訶の置く所、錦城の西に在
り。)とあつて、「摩訶」が竜に因むのか蕭摩訶に因むのかは分
からない。船遊びの場としてよく知られていたようで、例えば
杜甫に「晚秋陪嚴鄭公摩訶池泛舟」(『杜詩詳注』卷十四)があ
る。○『録異記』前蜀・杜光庭撰。『崇文總目』等によれば
もと十巻であつたようだが、現在の通行本は八巻しか残ってい
ない。現行本は百三十七話を内容別に分類し、巻一は「仙」、
巻二は「異人」、巻三は「忠」「孝」「感応」「異夢」、巻四は「鬼
神」、巻五は「竜」「異虎」「異龜」「異龍」「異蛇」「異魚」、巻
六は「洞」、巻七は「異水」「異石」「異墓」を収録してい
る。この話は通行本の巻五「竜」に収められている。

〔訳文〕

癸酉の年(九一三)、犀浦県の県界の畑で青黒い小竜が真つ
二つに引き裂かれていた。十日ほど経つと腐敗し、まもなく無
くなってしまった。

摩訶池のところの役所の西側にも靈驗あらたかな竜井があり、人は近づいてはいけない。

○78 「井魚」

〔本文〕

成都書臺坊武侯宅南、乘煙觀内古井中有魚、長六七寸。往往游於井上、水必騰湧。相傳井中有龍。(出『録異記』)

〔訓読〕

成都書臺坊の武侯宅の南、乘煙觀内の古井中に魚有り、長六七寸。往往にして井上に游べば、水必ず騰湧す。相伝へて井中に竜有りと。

〔語注〕

○成都 現在の四川省成都市。○書臺坊 成都城の諸葛亮読書台の故地にあたる坊の名か。『太平寰宇記』卷七十二「劍南道・益州・華陽県」に「讀書臺、在縣北一里。諸葛亮相蜀、築此臺以集諸儒、兼以待四方賢士、號曰讀書臺。在章城門路西、今爲乘煙觀。」(讀書臺は、県の北一里に在り。諸葛亮蜀に相たり、此の臺を築きて以て諸儒を集め、兼ねて以て四方の賢士を待し、号して讀書臺と曰ふ。章城門路の西に在り、今乘煙觀と爲る。)とある。○武侯宅 諸葛亮の旧宅。『太平寰宇記』卷七十二「劍南道・益州・華陽県」に「武侯宅、在府西北二里。今爲乘煙觀、有祠在觀内。」(武侯の宅は、府の西北二里に在り。今乘煙觀と爲り、祠有りて觀内に在り。)とある。○乘煙觀 道觀の名。

もと諸葛亮の旧宅で、ここで昇天した諸葛亮の娘を祀っているという。魏了翁『朝貞觀記』略(『蜀中広記』卷七十三引)に「出少城西北爲朝貞觀。觀中左列有聖母仙師乘煙葛女之祠。觀西有武侯祠。是丞相亮故宅也。故老相傳、亮有女子宅中乘雲輕舉。唐天寶元年、章公始更祠爲觀、奏名乘煙。」(少城の西北に出づるを朝貞觀と爲す。觀中の左列に聖母仙師乘煙葛女の祠有り。觀の西に武侯祠有り。是丞相亮の故宅なり。故老相伝ふ、亮に女有り宅中に于いて雲に乗りて輕挙すと。唐天寶元年、章公始めて祠を更めて觀と爲し、乘煙と名づけんことを奏す。)とある。○『録異記』前蜀・杜光庭撰。『崇文總目』等によればもと十卷であったようだが、現在の通行本は八巻しか残っていない。現行本は百三十七話を内容別に分類し、卷一は「仙」、卷二は「異人」、卷三は「忠」「孝」「感応」「異夢」、卷四は「鬼神」、卷五は「竜」「異虎」「異龜」「異龍」「異蛇」「異魚」、卷六は「洞」、卷七は「異水」「異石」、卷八は「墓」を収録している。この話は通行本の卷五「竜」に収められている。

〔訳文〕

成都書台坊の武侯宅の南に乘煙觀があり、その古井戸の中に大きき六、七寸(一寸≒三.一cm)の魚がいた。この魚がしばしば井戸のあたりを泳ぐと、水が必ず沸き立つのであった。この井戸の中には竜がいると伝えられている。

○79 「安天龍」

〔本文〕

後唐同光中、滄洲民有子母苦於科徭、流移近界堦店。（上恨音。）路逢白蛇、其子以繩擊蛇項、約而行、無何擺其頭落。須臾、一片白雲起、雷電暴作。撮將此子上天空中、爲雷火燒殺墜地。而背有大書、人莫之識。忽有一人云、「何不以青物蒙之。即識其字。」遂以青裙被之、有識字讀之曰、「此人殺害安天龍、爲天神所誅。」

葆光子曰、龍神物也。況有安天之號。必能變化無方、豈有一豎子繩而殞之、遽致天人之罰。斯又何哉。（出『北夢瑣言』）

〔訓誦〕

後唐の同光中、滄洲の民に子母の科徭くわうに苦しむ、近界の堦店こうてんに流移する有り。路に白蛇に逢ひ、其の子繩を以て蛇の項を撃ち、約して行くに、何も無くして其の頭を擺ふるひて落とす。須臾にして、一片の白雲起り、雷電暴かに作なこる。撮つまみて此の子を將もちて天空の中に上らしめ、雷火の焼殺するところと爲りて地に墜おつ。而して背に大書有るも、人ひと之を識る莫し。忽ち一人有りて云ふ、「何ぞ青物を以て之を蒙かぶはざる。即ち其の字を識らん」と。遂に青裙を以て之を被かへば、字を識るもの有りて之を讀みて曰く、「此の人安天龍を殺害すれば、天神の誅する所と爲る」と。

葆光子曰く、竜は神物なり。況んや安天の号有らんや。必ず能く変化して方無きに、豈に一豎子の繩して之を殞おし、遽かに

天人の罰を致す有らんや。斯れ又た何ぞや、と。

〔語注〕

○後唐 五代十国の一つ。九二三〜九三六。李克用の子の李存勗が建てたが、四代皇帝李從珂の時、石敬瑭が建てた後晋に滅ぼされた。○滄洲 現在の河北省滄州市一帯。○科徭 国が人民に課す義務的労働。また租税と夫役。○堦店 「堦」は地名か。「店」は本来旅館や荷物を預かる倉庫業を指すが、そこからその店舗のある地名、集落を指すこともある。ここではその意味か。○安天龍 未詳。○葆光子 孫光憲の号。？〜九六八。字は孟文。陵州貴平の人。この話の出典である『北夢瑣言』の著者。家はもと農民であつたが幼くして学問を志し、唐末に陵州判官となつた。唐滅亡後に江陵に移り、後唐の天成元年（九二六）に高季興に用いられて荆南節度副使、檢校秘書少監兼御史大夫に至つた。その後宋に仕えて黄州刺史となり、乾徳六年（九六八）に学士に推薦されたが、召される前に亡くなつた。詞人としても知られる。『荊台集』、『鞏湖編玩』など多くの著述があるが、現存するのは『北夢瑣言』のみ。『宋史』卷四百八十三に伝がある。○『北夢瑣言』 宋の孫光憲の撰。もと三十卷であつたらしいが、現行本は二十卷。主として唐末、五代の軼事載せている。北夢の称は光憲が初め高季興に従つて荆州夢沢の北にいたのによつてゐる。この話は現行の二十卷には無く、民国の繆荃孫が補つた『北夢瑣言逸文』卷四に収められている。

〔訳文〕

後唐の同光年間（九二三～九二六）、課税と労役に苦しんで近隣の塾店に流れてきた滄洲の民の母子がいた。道中白蛇に出くわしたので、子供が縄で蛇の首を叩き、縛って連れて行くと、白蛇は何事も無いのに頭をぶるぶる振って落としてしまった。しばらくすると白雲が一面に沸き起こり、突然雷が落ちた。そして何かが子供を空中につまみ上げ、雷で焼き殺して地面に落とした。背中には大きな字で何か書いてあったが、誰も読めなかった。突然ある人が「青い物で覆ってはどうか。そうすれば字が分かるだろう。」と言った。そこで青い裳裾で覆い、字が読める者が読んだところ、「この人は安天竜を殺害したので、天神によって誅殺された。」とのことだった。

葆光子こと私が思うに、竜は神聖な物であるのに、どうして「安天」などと号することがあろうか。また竜はあらゆる物に変化することができるに違いないのに、どうして小僧如きが縄で縛って殺し、急に天から人間へ罰を与えるようなことがあるうか。これはどういふことか。

○80 〔曹寛〕

〔本文〕

石晉時、常山帥安重榮將謀干紀。其管界與邢臺連接、鬪殺一龍。鄉豪有曹寛者見之、取其雙角。前有一物如簾、文如亂錦。人莫知之。曹寛經年爲寇所殺。壬寅年、討鎮州、誅安重榮也。

葆光子讀『北史』、見陸法和在梁時、將兵拒侯景將任約於江上。曰、「彼龍睡不動。吾軍之龍、甚自躍踊。」遂擊之大敗、而擒任約。是則軍陣之上、龍必先鬪。常山龍死、得非王師大捷、重榮授首乎。黄巢敗於陳州、李克用脱梁王之難、皆大雨震雷之助。（出『北夢瑣言』）

〔訓読〕

石晉の時、常山の帥安重榮將に干紀を謀らんとす。其の管界と邢臺と連接し、一竜を鬪殺す。郷豪に曹寛なる者有りて之を見、其の双角を取る。前に一物の簾の如き有り、文乱錦の如し。人之を知る莫し。曹寛年を経て寇の殺す所と為る。壬寅の年、鎮州を討ち、安重榮を誅するなり。

葆光子『北史』を読むに、見る陸法和梁に在りし時、兵を將ゐて侯景の將任約を江上に拒む。曰く、「彼の竜睡りて動かず。吾が軍の竜、甚だ自ら躍踊す」と。遂に之を撃ちて大いに敗り、而して任約を擒にす。是則ち軍陣の上、竜必ず先に鬪ふ。常山の竜死すれば、王師大捷し、重榮首を授けらるるに非ざるを得んや。黄巢陳州に敗れ、李克用梁王之難を脱するは、皆大雨震雷の助けなり。

〔語注〕

○石晉 後晋のこと。五代十国の一つ。九三六～九四六。石敬瑭が後唐を滅ぼして建てたが、二代で遼に滅ぼされた。○常山 郡名。現在の河北省石家荘市附近。後に見える「鎮州」に同じ。安重榮の根拠地。○安重榮 ?～九四二。後晋の節度使。

朔州の人。字は鉄胡。はじめ後唐の振武巡辺指揮使となり、のち後晋の高祖に仕えて成徳軍節度使となった。吐谷渾部落を誘って契丹の使者拽利を殺害、幽州の南境を略奪し、山南東道節度使安從進の挙兵に応じて叛した。しかし杜重威に攻められ、翌年斬首された。『旧五代史』卷九十八、『新五代史』卷五十一に伝がある。安重栄が封ぜられた成徳軍節度使は所謂「河朔三鎮」の一つで、会府は鎮州にあった。○干紀 規律違反。ここでは叛乱を起こすことを言うか。○邢臺 現在の河北省邢台市附近。○曹寛 未詳。正史には見えない。○亂錦 模様が鏤められた錦のことか。○鎮州 現在の河北省石家荘市附近。前に見える「常山」に同じで、安重栄が任ぜられた成徳軍節度使の会府があった。○葆光子 孫光憲の号。？く九六八。字は孟文。陵州貴平の人。この話の典故である『北夢瑣言』の著者。家はもと農家であったが幼くして字問を志し、唐末に陵州判官となった。唐滅亡後に江陵に移り、後唐の天成元年（九二六）に高季興に用いられて荆南節度副使、檢校秘書少監兼御史大夫に至った。その後宋に仕えて黄州刺史となり、乾徳六年（九六八）に学士に推薦されたが、召される前に亡くなった。詞人としても知られる。『荊台集』、『鞏湖編玩』など多くの著述があるが、現存するのは『北夢瑣言』のみ。『宋史』卷四百八十三に伝がある。○『北史』 唐の李延寿の撰。全百卷。北朝の北魏・西魏・東魏・北斉・北周・隋の歴史を記す。○陸法和 北斉の術士。初め江陵の百里洲に隠遁しており、後に荊州汶陽郡の高官

景の紫石山に入った。侯景が任約を派遣して梁元帝を撃たせた際、陸法和は元帝に討伐せんことを願ひ出て、首尾良く任約を捕らえた。その後、鄂州刺史に任ぜられたが、天保六年（五五五）春、北斉の清河王高岳が長江に進軍して来ると、法和は北斉に降った。北斉に行つても官職は用いず、「荆山居士」と名乗っていた。亡くなる際には弟子達に死期を告げ、その時になると香を焚いて仏に礼し、座つたまま亡くなった。その後遺体は段々小さくなって三尺ばかりになった。柩を開いてみると空っぽであったという。『北斉書』卷三十二、『北史』卷八十九に伝がある。この話でいう陸法和の話は、陸法和が任約の侵攻を防いだ際の話の指す。『北史』卷八十九「藝術伝上・陸法和」に「法和乗輕船、不介冑、沿流而下、去約軍一里乃還。謂將士曰、聊觀彼龍睡不動、吾軍之龍、甚自踊躍、即攻之。若得待明日、當不損客主一人而破賊、然有惡處。遂縱火船、而逆風不便、法和執白羽扇麾風、風即返。約衆皆見梁兵歩於水上、於是大潰、皆投水。」（法和輕船に乗り、介冑せず、流れに沿ひて下り、約の軍を去ること一里にして乃ち還る。將士に謂ひて曰く、「聊か觀るに、彼の竜は睡りて動かず、吾が軍の竜は、甚だ自ら踊躍すれば、即ち之を攻めん。若し明日を待つを得ば、當に客主一人も損なはずして賊を破るべきも、然れども悪処有らん」と。遂に火船を縱ち、而して逆風にして便ならざるも、法和白羽扇を執りて風を麾けば、風即ち返る。約の衆皆梁兵の水上に歩むを見、是に於いて大いに潰え、皆水に投ず。」とある。

○侯景 五〇三〜五五二。南北朝末期の武将。北魏の爾朱榮の部下として頭角を現し、その後東魏の高歓の旗下に入るが、背いて梁武帝に降る。梁と東魏の間に和議成立の情勢となると身の危険を悟って再び叛し、首都建康を陥落させて武帝を憤死させた。その後は簡文帝を擁立するも結局弑殺し、禪定を受けて自ら皇帝に即位、国号を漢としたが、梁元帝の配下王僧弁と陳霸先によって都を追われ、途上で殺害された。○任約 生卒年未詳。初め西魏に仕え、後に侯景に従って侯景の乱に参加したが、大宝二年（五五一年）に赤亭湖で胡僧祐や陸法和らに敗れて捕らえられ、江陵に送られた。そのまま梁に仕えたが、後に叛して北斉に仕えた。○授首 首を切られる。○黄巢 ？〜八八四。もとは塩の私商であったが僖宗の時に乱を起こし、長安をおとし入れて齊帝と号した。中和三年（八八三）に李克用に破れて長安を撤退したが、陳州で刺史趙犇の抵抗に遭い、三百日包圍するも破れず、再び李克用に急追されて破れて自殺した。『旧唐書』卷二百下、「新唐書」卷二百二十五「逆臣伝」に伝がある。この話でいう雨によって黄巢が陳州で敗れたというのは、『旧唐書』卷二百下「黄巢伝」に「四年二月、李克用率山西諸軍、由蒲陝濟河、會關東諸侯、赴援陳州。…（中略）…巢賊大恐、收軍營於故陽里、官軍進攻之。五月、大雨震雷、平地水深三尺、壞賊壘。賊自離散、復聚於尉氏、逼中牟。翌日、營汴水北。是日、復大雨震雷、溝塍漲流。賊分寇汴州、李克用自鄭州引軍襲擊、大敗之。」（四年二月、李克用山西の諸軍を率ゐ、

蒲陝より河を濟り、関東の諸侯を会し、赴きて陳州を援く。…（中略）…巢賊 大いに恐れ、軍營を故陽里に収むるも、官軍之に進攻す。五月、大雨震雷あり、平地水深きこと三尺、賊の壘を壊す。賊 自ら離散し、復た尉氏に聚まり、中牟に逼る。翌日、汴水の北に當す。是の日、復た大雨震雷あり、溝塍漲流す。賊 分れて汴州に寇し、李克用 鄭州より軍を引ききて襲撃し、大いに之を敗る。）とある。○陳州 現在の河南省周口市一帯。○李克用 八五六〜九〇八。後唐莊宗の父。黄巢軍を長安から追い出し、朱全忠と覇を競った。片目であったので独眼竜と称された。後唐建国後、太祖と諡された。『旧五代史』卷二十五〜二十六「唐書・武皇紀」に本紀がある。この話でいう雨によって梁王（朱全忠）の罾から逃れたというのは、中和四年（八八四）、朱全忠が酔いつぶれた李克用に夜襲をかけたが、折からの雨に紛れて逃げることでできたことを言う。『旧五代史』卷二十五「唐書・武皇紀」上に「汴帥素忌武皇、乃與其將楊彥洪密謀竊發。彥洪於巷陌連車樹柵、以扼奔竄之路。時武皇之從官皆醉、俄而伏兵竄發、來攻傳舍。…（中略）…有頃、煙火四合、復大雨震雷、武皇得從者薛鐵山、賀回鶻等數人而去。雨水如澍、不辨人物、隨電光登尉氏門、縋城而出、得還本營。」（汴帥素より武皇を忌めば、乃ち其の將 楊彥洪と密かに窃発せんことを謀る。彥洪 巷陌に於いて車を連ね柵を樹て、以て奔竄の路を扼す。時に武皇の從官皆酔ふに、俄かにして伏兵竄發し、來りて伝舍を攻む。…（中略）…有頃にして、煙火四

に合し、復た大雨震電あり、武皇 從者 薛鉄山、賀回鶻等数人を得て去る。雨水あそび澍ぐが如く、人物を辨ぜず、電光に随ひて尉氏の門に登り、城に縋かけて出で、本宮に還るを得たり。」とある。○梁王 朱全忠のこと。八五二〜九一二。五代後梁の太祖。黄巢の乱に参加したが唐に寝返り、僖宗からその功績で全忠の名を賜った。李克用と仇敵關係にあつたが、朱全忠が実権を握ることになった。天復元年（九〇一）梁王に封ぜられたが、唐昭帝・哀帝を殺して位を奪ひ、国を梁とした。在位六年で子の朱友珪に殺された。○『北夢瑣言』 宋の孫光憲の撰。もと三十卷であつたらしいが、現行本は二十卷。主として唐末、五代の軼事を載せている。北夢の称は光憲が初め高季興に従つて荊州夢沢の北にいたたのによつてゐる。この話は現行の二十卷には無く、民国の繆荃孫が補つた『北夢瑣言逸文』巻四に収められている。

〔訳文〕

石晋の時、常山の将帥の安重栄は叛乱を起こそうとしていた。彼の管轄地は邢台と隣接しているのだが、そこでは竜が戦つて一頭死ぬことがあつた。当地の豪族の曹寛がそれを見て、竜の角を二本採取した。角の前には簾のようなものがあつて、模様が見えられた錦のようだったが、誰もそれが何なのか分からなかつた。曹寛は数年後に賊によつて殺されてしまった。壬寅の年（九四二）、鎮州は討伐され、安重栄は誅殺された。

葆光子こと私が『北史』を読むに、陸法和が梁にいた頃、兵

を率いて侯景の部将任約の侵攻を長江のほとりで防いだ際、「あちらの竜は眠つて動かぬが、我が軍の竜は躍動しておるぞ。」と言つた。そして任約を大いに打ち破つて捕虜にした。これは戰場では竜が必ず人間より先に戦うことである。常山の竜が死んだからには、王の軍が大勝して安重栄が首を斬られない訳がない。黄巢が陳州で敗れ、李克用が朱全忠の罠から逃れることができたのは、皆大雨や雷の助けがあつたのである。

○81「夢青衣」

〔本文〕

孟蜀主母后之宮有衛聖神龍堂、亦嘗修飾嚴潔。蓋即世俗之家神也。一旦別欲廣其殿宇。因晝寢、夢一青衣謂后曰、「今神龍意欲出宮外居止。宜于寺觀中安排可也。」后欲從之、而子未許。后又夢見青衣重請。因選昭覺寺廊廡間、特建一廟。

土木既就、繪事云畢。遂宣教坊樂、自宮中引出、奏送神曲、歸新廟中、奏迎神曲。其日玄雲四合、大風振起。及神歸位、兩即滂沱。

或曰、衛聖神龍出離宮殿、是不祥也。逾年、國亡滅而去。土地歸廟中矣。（出『野人閑話』）

〔訓読〕

孟蜀主の母后の宮に衛聖神竜堂有り、亦た嘗に修飾すること嚴潔なり。蓋し即ち世俗の家神なり。一旦別に其の殿宇を広げんと欲す。因りて昼寝するに、夢に一青衣后に謂ひて曰く、

「今神竜意に宮外に出でて居せんと欲す。宜しく寺観中に于いて安排するは可なるべきなり」と。后之に従はんと欲するも、而るに子未だ許さず。后又た夢に青衣の重ねて請ふを見る。因りて昭覺寺の廊廡の間を選び、特に一廟を建つ。

土木 既に就り、絵事云に畢はる。遂に教坊樂に宣り、宮中より引き出だすに、送神曲を奏せしめ、新廟中に帰せしむるに、迎神曲を奏せしむ。其の日玄雲四に合し、大風振起す。神の位に帰するに及び、雨即ち滂沱たり。

或るひと曰く、衛聖神竜出でて宮殿を離るるは、是不祥なりと。年を逾え、国亡滅して去る。土地廟中に帰す。

〔語注〕

○孟蜀 五代十国の一つ、後蜀のこと。九三四～九六五。咸康元年（九二五）に前蜀が後唐によって滅ぼされた後、孟知祥が西川節度使としてこの地を治めていたが、天成五年（九三〇）に拳兵して蜀全域を制圧、明德元年（九三四）に後蜀を建国した。その後、広成二十八年（九六五）に宋に併合されて滅びた。○母后 皇帝の母。この話の末尾で翌年に国が滅びたということとは、後蜀の二代皇帝孟昶の母、李太后のことになるが、新旧『五代史』等にはこのような話は伝わらない。○衛聖神龍堂 未詳。本文の記載からすると、一家を守護する竜神を祀る廟か。○昭覺寺 成都北郊にある大寺院の名。貞觀年間（六二七～六四九）に建立され、当初は建元寺と言ったが、僖宗の時に拡張され、昭覺寺の名を賜った。崇禎十七年（一六四四）に戦火に

焼かれたが、主要な建物のいくつかは現存している。曹学佺『蜀中名勝記』卷三「成都府」に「昇仙橋北、長林蒼翠、曲澗潺湲、大非人世間境。乃昭覺禪寺。」（昇仙橋の北、長林蒼翠、曲澗潺湲として、大いに人世間の境に非ず。乃ち昭覺禪寺なり。）とある。○廊廡 表御殿に付属した細長い建物。○云畢 儀式などが終わること。『貞觀政要』「封建」篇に「刑措之教一行、登封之禮云畢。」（刑措の教へ一たび行はれ、登封の礼云に畢はる。）とある。○教坊樂 教坊に同じ。唐代以降、宮中で音楽や舞踊を専門に行う者を管理し養成する機関。○『野人閑話』 北宋の景煥が編纂した小説集。既に佚して伝わらない。『說郛』に引く『野人閑話』に乾德三年（九六五）の自序がある。

〔訳文〕

後蜀の皇太后の宮殿には衛聖神竜堂がある。いつも蔽かて清潔にしつらえられていた。思うに世俗という屋敷神にあたるものである。ある日、別にもっと広い建物を建てようと考えた。そして昼寝していた時、夢に青衣の侍女が一人現れて、皇太后に「今神竜様は宮城の外に出て住みたいと思召しです。寺院や道観にお祀りするのがよろしいでしょう。」と言った。皇太后はそのお告げに従いたいと思ったが、子である皇帝は許さなかつた。皇太后はまた青衣の侍女を重ねて願ひ出る夢を見たので、昭覺寺の脇部屋を選び、そこに別に廟を一つ建てることにした。

普請が終わり、内装の壁画も完成した。そして教坊楽に、神竜を宮中からお連れする際には送神曲を演奏し、新しい廟にお入りいただく際には迎神曲を演奏するように命じた。神竜の引越しの日、黒い雲が四方から集まり、大風が吹き荒れた。神竜が神を祀る位置に鎮座されると、大雨がすぐに降り出した。衛聖神竜が宮殿を出て離れるのは不吉であると言う人がいた。翌年、後蜀は滅亡した。廟が建てられた土地は廟に帰属することになった。

◇「蛟」

○82 「漢武白蛟」

〔本文〕

漢武帝恆に季秋之月、汎靈溢之舟於琳池之上、窮夜達晝。于季臺之下、以香金爲鉤、縮絲綸、以舟鯉爲餌。不踰旬日、釣一白蛟長三四丈。若龍而無鱗甲。帝曰、「非龍也。」於是付太官爲鮓。而肉紫青、脆美無倫。詔賜臣下、以爲神感所獲。後竟不得。
(出「王子年拾遺記」)

〔訓読〕

漢武帝 恒に季秋の月を以て、靈溢の舟を琳池の上に汎べ、夜を窮めて昼に達す。季臺の下に于いて、香金を以て鉤と爲し、絲を縮めて綸とし、舟鯉を以て餌と爲す。旬日を踰えずして、一白蛟の長三四丈なるを釣る。竜の若くして鱗甲無し。帝曰

く、「竜に非ざるなり」と。是に於いて太官に付し鮓と爲さしむ。而して肉紫青、脆美なること倫無し。詔して臣下に賜り、以て神感の獲しむる所と爲す。後竟に得ず。

〔語注〕

○漢武帝 前一五六年～前八七年、在位一四一年～前八七年。漢の七代皇帝。名は徹。匈奴を討伐し、西域・安南・朝鮮を経略し、儒教を政治・教化の基とした。ただしこの話は『拾遺記』では「元鳳二年（前七九）」となっており、武帝ではなく、八代皇帝昭帝の話ということになる。○季秋之月 旧曆九月のこと。一年を四季に分け、四季の中の三ヶ月をそれぞれ「孟」「仲」「季」と呼ぶ。○靈溢之舟 未詳。「雲鵠之舟」のことか。雲鵠の舟は舟首の水鳥の飾りに雲母を貼り付けた豪華な舟。『三輔黄图』卷四「池沼」に「成帝常以秋日與趙飛燕戲於太液池。以沙棠木爲舟、以雲母飾於鵠首。一名雲舟。」（成帝常て秋日を以て趙飛燕と太液池に戯る。沙棠木を以て舟と爲し、雲母を以て鵠首を飾る。一に雲舟と名づく。）とある。『拾遺記』は「蘅蘭雲鵠之舟」に作る。○琳池 昭帝が始元元年（前八六）に穿つた池。『漢書』には記載がないが、『三輔黄图』卷四「池沼」に「琳池、昭帝始元元年、穿琳池。廣千歩、池南起桂臺以望遠。東引太液之水。」（琳池は、昭帝の始元元年、琳池を穿つ。広さ千歩、池の南に桂臺を起して以て望遠す。東のかた太液の水を引く。）とある。○季臺 未詳。前注に言う「桂臺」に同じか。『拾遺記』は「臺」に作る。○香金 未詳。質の良い金を

言うか。○縮絲綸 「綸」は釣り糸。糸を撚よって釣り糸とすることか。『拾遺記』は「縮絲爲綸」に作る。縮絲は浅葱色の糸。

○舟鯉 舟ほどの大きさの鯉の意か。或いは「丹鯉」の誤か。

『拾遺記』は「丹鯉」に作る。○蛟 みずち。竜の一種で四足があり、よく大水を起こすという。任昉『述異記』巻上に「水虺五百年化爲蛟、蛟千年化爲龍、龍五百年爲角龍、千年爲應龍。」(水虺は五百年にして化して蛟と爲り、蛟は千年にして化して竜と爲り、竜は五百年にして角竜と爲り、千年にして応竜と爲る。)とある。○太官 宮中の食事を司る役所。長官を太官令、次官を太官丞という。○鮓 つけうお。塩と麴や糟などでつけ込んでかもした魚。なれずしの類。○脆美 肉が軟らかでうまいこと。○『王子年拾遺記』『拾遺記』に同じ。晋・王嘉撰。子年は王嘉の字。この書は一度散佚し、現在見られるのは梁の蕭綺が復元したものである。三皇五帝以来の異聞を時代別に蒐集している。この話は通行本の巻六に収められている。

〔訳文〕

漢武帝はいつも秋九月となると、靈溢の舟を琳池に浮かべ、夜通し翌日の昼まで遊んだ。季台の下では香金で釣り針を作り、糸を撚よって釣り糸とし、舟程の大きさの鯉を餌として釣りをした。十日も経たないうちに、三、四丈(一丈＝二、四一二m)程の白蛟が一頭釣れた。竜のようだが鱗が無かった。武帝は「これは竜ではない。」と言い、太官に下げ渡してなれずしを作らせた。肉は青紫で、この上なく柔らかで美味しかった。武帝

は詔を下して臣下に賜り、神が自分に感じて捕まえさせてくれたのだと考えた。その後は二度と捕まらなかつた。

○83 「潯陽橋」

〔本文〕

潯陽城東門通大橋。常有蛟爲百姓害。董奉疏符沈水中、少日、見一蛟死浮出。(出『潯陽記』)

〔訓読〕

潯陽城の東門大橋に通ず。常て蛟有りて百姓の害と爲る。董奉符を疏して水中に沈むるに、少日にして、一蛟の死して浮き出づるを見る。

〔語注〕

○潯陽城 現在の江西省九江県。近くに廬山がある。○董奉 神仙の名。『神仙伝』巻六に伝がある。但し『神仙伝』には蛟を退治する話は載せられていない。○疏符 「疏」はえがく。呪符を書すこと。○『潯陽記』 『潯陽記』に同じ。晋宋の人張僧監撰、山謙之撰、王縝撰の三種類がある。皆既に散佚しており、現在は逸文しか見ることができないが、どれも廬山を中心にした潯陽に関する記事を記したもののようである。

〔訳文〕

潯陽城の東の門は大きな橋に通じている。ここではかつて蛟が人々に禍をなしていた。そこで董奉が符を書いて水中に沈めると、数日後には一頭の蛟が死んで浮かび上がった。

○84 「王述」

〔本文〕

吳大帝赤烏三年七月、有王述者採藥於天台山。時熱、息於石橋下。臨溪飲、忽見溪中有一小青衣長尺餘、執一青衣（衣字原闕。據明鈔本補。）乘赤鯉魚。徑入雲中、漸漸不見。

述良久登峻岩四望、見海上風雲起。頃刻雷電交鳴、俄然將至。述懼、伏于虛樹中、見牽一物如布、而色如漆、不知所適。

及天霽、又見所乘之赤鯉小童、還入溪中。乃黑蛟耳。（出『三吳記』）

〔訓詁〕

吳大帝の赤烏三年七月、王述なる者有り。藥を天台山に採る。時に熱くして、石橋の下に息ふ。溪に臨みて飲むに、忽ち溪中に一小青衣の長尺余なる有りて、一青衣を執りて赤鯉魚に乗るを見る。徑ちに雲中に入り、漸漸として見えず。

述良久しくして峻岩に登りて四に望めば、海上に風雲の起こるを見る。頃刻にして雷電交も鳴り、俄然として將に至らんとす。述懼れ、虚樹の中に伏するに、一物の布の如く、而して色漆の如きを牽くを見、適く所を知らず。

天の霽るるに及び、又た乗る所の赤鯉の小童の、還りて溪中に入るを見る。乃ち黒蛟なるのみ。

〔語注〕

○吳大帝 孫権のこと。一八二―二五二。字は仲謀。父孫堅、兄孫策の業を継ぎ、三国の一つ呉を建国した。○王述 未詳。

正史には見えない。○天台山 現在の浙江省台州市天台県の北にある山の名。『幽明録』に漢の劉晨・阮肇がこの山で薬を採っていて二人の女性に出会い、帰って見ると村には誰も見知った者は居らず、七世の孫がいたという。○『三吳記』 未詳。三吳に関する地誌の類か。三吳は呉興（現在の浙江省湖州市一带）、呉郡（現在の浙江省蘇州市一带）、会稽（現在の浙江省紹興市一带）或いは丹陽（現在の浙江省南京市一带）の三地域の事。『太平広記』には四話が採録されている。

〔訳文〕

吳大帝孫権の赤烏三年（二四〇）七月、王述という人が天台山で薬を採集していた。丁度その時暑かったので、石橋の下で休憩していた。谷川の所に行つて水を飲んでみると、突然谷川の中に身の丈一尺（二四・一二cm）ほどの小さな青衣の侍女が一人いて、もう一人の青衣の侍女をつかんで赤い鯉に乗るのを見た。彼女たちは真っ直ぐ雲の中に入つて行って、段々見えなくなった。

王述がしばらくして切り立った岩に登つて四方を眺めてみると、海の上に風と雲が沸き起こるのが見えた。しばらくすると雷鳴があちこちで鳴り響き、急にこちらまで来そうになった。王述が怖くなつて樹の洞の中に伏せていると、漆のように真っ黒い、布のような物が引っぱられてどこかへ行つてしまった。空が晴れると、また赤い鯉に乗っていた青衣の子供が谷川に戻つていくのを見た。あれはなんと黒い蛟だったのである。

○85 「王植」

〔本文〕

王植、新贛人也。乘舟過襄江、時晚日遠眺。謂友朱壽曰、「此中昔楚昭王獲萍實之處、仲尼言童謠之應也。」壽曰、「他人以童謠爲偶然、而聖人必知之。」言訖、見二人自岸下。

青衣持蘆杖謂植曰、「卿來何自。」植曰、「自新贛而至於此爾。」

二人曰、「觀君皆儒士也。習何典教。」植、壽曰、「各習詩禮。」

二人且笑曰、「尼父云、『子不語神怪。』又云、『敬鬼神而遠之。』何也。」壽曰、「夫子聖人也。不言神怪者、恐惑典教。又言『敬鬼神而遠之』者、以戒彝倫。其意在奉宗之孝。」二人曰、「善。」

又曰、「卿信乎。」曰、「然。」

二人曰、「我實非鬼神、又非人類。今日偶與卿談。乃天使也。」

又謂植曰、「明日此岸有李環、戴政。俱商徒、以利剝萬民、所貪未已。上帝惡、欲懲其罪於三日內。卿無此泊。慎之。」言訖、沒於江。壽、植但驚異之、未明何怪也。

及明、植謂壽曰、「有此之不祥、可移於遠矣。」乃牽舟于上流五百餘步。纜訖、見十餘大舟自上流而至、果泊於植本處。植曰、「可便詳問其故。要知姓字。」於是壽杖策而問之。二商姓字、果如其所言。壽心驚曰、「事定矣。」乃謂植曰、「夫陰晦之間、惡人之不善、今夕方信之矣。」植曰、「夫言幽明者、以幽有神而神之明、奈何不信乎。」時晉恭帝元熙元年七月也。八日至十日、果有大風雷雨、而二商一時沈溺。

植初聞二人之言、私告於人。及是共觀者有數百人。內有耽諛

者年七十、素諳土事。謂植曰、「此中有二蛟如青蛇、長丈餘。往往見於波中、時化遊於洲渚。然亦不甚傷物。卿所見二人青衣者、恐是此蛟有靈、奉上帝之命也。」(出「九江記」)

〔訓詁〕

王植は、新贛しんかんの人なり。舟に乗りて襄江を過すぐるに、時に晚日遠く眺む。友の朱寿に謂ひて曰く、「此の中昔楚昭王萍実を獲るの処、仲尼童謠の応を言ふなり」と。寿曰く、「他人童謠を以て偶然と爲すも、而るに聖人必ず之を知れり」と。言ひ訖りて、二人の岸より下るを見る。

青衣 蘆杖を持ちて植に謂ひて曰く、「卿来たること何れよりするか」と。植曰く、「新贛よりして此に至るのみ」と。二人曰く、「君を觀るに皆儒士なり。何れの典教を習ふか」と。植、寿曰く、「各おの詩礼を習ふ」と。二人且つ笑ひて曰く、「尼父云ふ、『子神怪を語らず』と。又た云ふ、『鬼神を敬して之を遠ざく』と。何ぞや」と。寿曰く、「夫子は聖人なり。神怪を言はざるは、典教を惑はざんことを恐る。又た『鬼神を敬して之を遠ざく』と言ふは、以て彝倫いりんを戒む。其の意、宗を奉るの孝に在り」と。二人曰く、「善し」と。又た曰く、「卿は信とするか」と。曰く、「然り」と。

二人曰く、「我実まことに鬼神に非ず、又た人の類に非ず。今日偶たまたまたま卿と談ず。乃ち天の使ひなり」と。又た植に謂ひて曰く、「明日此の岸に李環、戴政有り。俱に商徒にして、利を以て万民を剝むなひ、貪る所未だ已まず。上帝惡み、其の罪を三日

の内に懲らさんと欲す。卿此の泊無からんことを。之を慎しめよ」と。言ひ訖りて、江に没す。寿、植但だ之に驚異し、未だ何れの怪なるかを明らかにせざるなり。

明に及び、植寿に謂ひて曰く、「此の不祥有れば、遠きに移るべし」と。乃ち舟を上流に牽くこと五百余歩。纜とらうなすること訖はり、十余の大舟の上流よりして至り、果して植の本処に泊まるを見る。植曰く、「便ち詳らかに其の故を問ふべし。姓字を知らんことを要む」と。是に於いて寿策を杖つきて之に問ふ。二商の姓字、果して其の言ふ所の如し。寿心に驚きて曰く、「事定まれり」と。乃ち植に謂ひて曰く、「夫れ陰晦の間、人の不善を悪にくむは、今夕方はじめて之を信ず」と。植曰く、「夫れ幽明を言ふ者は、幽に神有りて神は之明なるを以てすれば、奈何ぞ信ぜざらんや」と。時に晋恭帝元熙元年七月なり。八日より十日に至り、果して大風雷雨有り、而して二商一時に沈溺す。植初め二人の言を聞き、私かに人に告ぐ。是に及びて共に観る者数百人有り。内に耽譚なる者有り年七十、素より土事を諳さちんず。植に謂ひて曰く、「此の中に二蛟有り青蛇の如く、長丈余。往往にして波中に見れ、時に化して洲渚に遊ぶ。然れども亦た甚だしくは物を傷つけず。卿の見る所の二人の青衣の者は、恐らくは是此の蛟に靈有り、上帝の命を奉りしならん」と。

〔語注〕

○王植 未詳。正史には見えない。○新贛 未詳。なお「贛」

は県名で、今の江西省贛州市。○襄江 襄水に同じか。『太平寰宇記』卷百四十五「山南東道・襄州・襄陽県」に「涑水、亦名襄水。荆楚之地水駕山而上者、皆呼爲襄上也。今土人呼涑水上流亦呼爲襄、水名即無定。」（涑水、亦た襄水と名づく。荆楚の地水山に駕して上る者、皆呼びて襄上と爲すなり。今土人涑水の主流を呼びて亦た呼びて襄と爲せば、水の名即ち定まり無し。）とある。○朱壽 未詳。正史には見えない。○楚昭王獲萍實之處 楚昭王は春秋戦国時代の楚の王。前五六一前四八九。『春秋左氏伝』哀公六年に「孔子曰、楚昭王知大道矣。其不失國也、宜哉。」（孔子曰く、「楚の昭王は大道を知れり。其の国を失はざるや、宜しきかな」と。）とあり、孔子は高く評価していた。この話は『說苑』「弁物」篇に、楚の昭王が長江を渡る時に、升位の大きさのものが王の舟にぶつかった。昭王が怪しんで孔子に尋ねたところ、孔子は「此名萍實。令剖而食之。惟霸者能獲之。此吉祥也。」（此名は萍実。剖きて之を食らはしむ。惟だ霸者のみ能く之を獲。此吉祥なり。）と答えたという話を踏まえる。○仲尼言童謡之應 前項「楚昭王獲萍實之處」注に引く『說苑』の続きに、孔子が弟子に「異時小兒謠曰、楚王渡江得萍實、大如拳、赤如日、剖而食之、美如蜜。此楚之應也。…（中略）…夫謠之後、未嘗不有應隨者也。故聖人非獨守道而已也。睹物記也、即得其應矣。」（異時小兒の謠に曰く、「楚王、江を渡りて萍実を得、大なること拳の如く、赤きこと日の如く、剖きて之を食らば、美きこと蜜の如し」と。

此楚の応なり。…(中略)…夫れ謡の後、未だ嘗て応随する者有らずんばあらざるなり。故に聖人は独り道を守るのみに非ざるなり。物を睹みて記さば、即ち其の応を得ん。)と語つたところある。○子不語神怪 『論語』「述而」篇に「子不語怪力亂神。」「子怪力亂神を語らず。)とある。○敬鬼神而遠之 『論語』「雍也」篇に「子曰、務民之義、敬鬼神而遠之。可謂知矣。」「子曰く、「民の義に務め、鬼神を敬ひて之を遠ざく。知と謂ふべし。）」とある。○彝倫 人として守るべき不変の法。○李環・戴政 未詳。正史には見えない。○晉恭帝 三八六〜四二一、在位四一九〜四二〇。東晋最後の皇帝。名は司馬德文。四一八年に兄の安帝が殺されると帝位に就かされたが、劉裕が入京するや讓位を迫られた。退位後、毒殺を恐れて褚皇后が自ら調理していたが、乱入した兵士に殺された。『晋書』卷十に本紀がある。○耿譚 未詳。正史には見えない。○『九江記』 未詳。九江に関する地誌の類か。九江は諸説あり、川の名とも洞庭湖の古称とも郡の名とも言う。『太平広記』には五話が採録されている。或いは『九江志』と同じか。『九江志』は魏・何晏撰の佚書であるが、『說郛』(宛委山堂本) 写六十一に五話が採録されている。ただしこの話は見えない。

〔訳文〕

王植は新贛の人である。舟に乗って襄江を通っていた際、日が暮れて遠くを眺めていた。王植は友人の朱寿に「ここは昔楚の昭王が浮き草の実を採ったところであり、孔子が童謡の兆

しを述べたところだ。」と言った。朱寿は「童謡は偶然だという者もいるが、聖人はきつとどういうことか分かっているのだろうか。」と言った。話し終わると、二人連れが岸から下りてくるのが見えた。

声の杖を持った青衣の人が王植に「お前はどこから来たのか。」と尋ねると、王植は「新贛からここに来ました。」と答えた。二人は「そなたらを見るにどちらも儒士のような。いかなる典籍を学んだか。」と尋ねた。王植と朱寿は「それぞれ『詩』と『礼』を学んでおります。」と答えた。二人は笑いながら、「孔子殿は『子神怪を語らず』と言い、『鬼神を敬して之を遠ざく』と言っているが、どういうことか。」と尋ねた。朱寿は「孔子様は聖人です。神怪を語らないのは、教えを惑わすことを恐れたのです。また『鬼神を敬して之を遠ざく』と言ったのは、人類不変の道を守るように戒めたのです。孔子様のお考えは祖先を尊ぶ孝にあります。」と答えた。二人は「よかろう。」と言った。また「お前たちはそれを正しいと思うか。」と尋ねた。王植と朱寿は「はい。」と答えた。

二人は「私達は実は鬼神でも人間でもない。今日はたまたまお前と語らったが、天の使者なのだ。」と言った。また王植に「明日この岸に李環と戴政という者が来る。どちらも商人で、利益を求めて万民を害し、際限なく貪つておる。上帝が彼らを快く思わず、三日の内に懲罰を与えようとしている。お前は決してここに停泊してはならない。」と言った。言い終わると川

の中に沈んでいった。朱寿と王植は驚くばかりで、彼らが如何なる怪異であるのかよく分からなかった。

夜が明けると、王植は朱寿に「こんな不吉なことがあったのだから、速くに移動しよう。」と言った。そして舟を上流に五百歩余り（一步＝一、四四七二m）移動させた。纜を結び終わると、大きな舟が十数艘上流から下つてきて、確かに王植が元々停泊させていたところに舟を泊めた。王植は「詳しく話を聞いてみよう。名前が知りたい。」と言った。そして朱寿が杖をついて尋ねに行った。商人二人の名前は確かに先の青衣の人が言つたとおりであつた。朱寿は内心「物事には定めというものがあるのだな。」と驚いた。そして王植に「そもそも目に見えぬ世界は人間が悪行を働くことを嫌うということが、今晚やつと分かつた。」と言つた。王植は「そもそも『幽明』というのは、目に見えぬ『幽』の中に真理たる『神』があり、『神』こそが『明』なのであるから、どうして信じない訳にくいだらうか。」と言つた。晋恭帝の元熙元年（四一九）七月のことである。八日から十日まで、確かに大風と雷雨があり、商人二人は一度に溺れてしまった。

王植は二人の言葉を聞いてまもなく、こつそり他の人にこのことを話していた。そうして一緒に目撃した者は数百人いた。その中に耽譚という者がいた。歳は七十歳で、もともと地域にまつわる話を暗記していた。耽譚は王植に「ここには青蛇のようで、身の丈一丈（一丈＝三、一一m）ほどの蛟が二匹棲みつ

ている。しばしば波間に姿を現し、時には姿を変えて渚に遊ぶ。しかし酷く物を傷つけることはしない。お前が見た青衣の二人は、恐らくこの蛟に神霊の力があつて、上帝の命を奉つて現れたのであろう。」と言つた。

○86 「陸社兒」

〔本文〕

陸社兒者、江夏民。常種稻於江際、夜歸、路逢一女子、甚有容質。謂社兒曰、「我昨自縣前來、今欲歸浦里。願投君宿。」然辭色甚有憂容。社兒不得已、同歸、閉室共寢。

未幾、便聞暴風震雷明照。社兒但覺此女驚惶、制之不止。須臾雷震、只在簾前。社兒寢室、有物突開。乘電光、見一大毛手拏此女去。社兒仆地、絶而復蘇。

及明、隣里異而問之。社兒告以女子投宿之事。少頃、鄉人有渡江來者。云、「此去九里、有大蛟龍無首、長百餘丈。血流注地、盤泊數畝。有千萬禽鳥、臨而謀之也。」（出『九江記』）

〔訓読〕

陸社兒は、江夏の民なり。常て稻を江際に種え、夜歸るに、路に一女子の、甚だ容質有るに逢ふ。社兒に謂ひて曰く、「我昨に県前より来たり、今浦里に帰らんと欲す。願はくは君が宿に投ぜん」と。然して辭色甚だ憂容有り。社兒已むを得ず、同に歸り、室を閉ざして共に寝ぬ。

未だ幾ならずして、便ち暴風を聞き、震雷明照す。社兒

但だ此の女の驚惶するを覚え、之を制するも止まず。須臾にして雷震あり、只だ簾前に在り。社児室に寝ぬるに、物の突き開く有り。電光に乗じ、一大毛手の此の女を拏みて去るを見る。社児地に仆し、絶えて復た蘇る。

明に及び、隣里異として之に問ふ。社児告ぐるに女子投宿の事を以てす。少頃にして、郷人に江を渡りて来たる者有り。云ふ、「此を去ること九里に、大蛟竜の首無きもの有り、長百余丈。血流れて地に注ぎ、盤泊すること数畝。千万の禽鳥有り、臨みて之に謀くなり」と。

〔語注〕

○陸社児 未詳。正史には見えない。○江夏 県名。現在の湖北省武漢市。○浦里 未詳。或いは具体的な地名ではなく、水辺の集落のことか。○『九江記』 未詳。九江に関する地誌の類か。九江は諸説あり、川の名とも洞庭湖の古称とも郡の名とも言ふ。『太平広記』には五話が採録されている。或いは『九江志』に同じか。『九江志』は魏・何晏撰の佚書であるが、『説郛』（宛委山堂本）写六十一に五話が採録されている。ただしこの話は見えない。

〔訳文〕

陸社児は江夏の民である。かつて川の側に稲を種え、夜に帰ろうとすると、道で一人のとても美しい女性に会った。女性は陸社児に「私は先頃県の役所の辺りからやって来て、今浦里に帰るところなのですが、どうかあなたの御宅に泊めてください

ませんか。」と言った。非常に困った様子であったので、陸社児は仕方なく連れて帰り、戸締めをして一緒に寝た。

どれほどでもない内に、暴風が吹き荒れる音が聞こえ、雷光が閃いた。陸社児は女性が驚き慌てるのを感じ取り、なだめようとしたがきかなかつた。しばらくすると雷が窓の簾の辺りで鳴り響いた。陸社児は室内で寝ていたが、何かが突き破つてきた。雷光で照らされて、一本の大きな毛むくじらの手が女性を引っつかんで行くのが見えた。陸社児は地面に倒れ伏して気絶し、その後息を吹き返した。

夜が明けると、近隣の人々が不思議に思つて陸社児に何があつたのか尋ねたので、陸社児は女性が泊まつていたことを話した。しばらくすると、川を渡つて来た村人が「ここから九里（約三・九km）のところ、首が無い百丈余り（一丈＝二・四一二m）の大きな蛟が、地面に血を流しながら数畝（一畝＝五・〇二六五三a）に渡つて蟠っていた。千羽万羽もの鳥が集まつてきて鳴き騒いでいた。」と言った。

○87 「長沙女」

〔本文〕

長沙有人忘姓名、家江邊。有女下渚澣衣、覺身中有異、後不以爲患。遂妊身、生三物。皆如鰕魚。女以己所生、甚憐之、著槃盤水中養。

經三月、此物遂大。乃是蛟子。各有字、大者爲當洪、次者名

破阻、小者曰撲岸。天暴雨、三蛟一時俱去、遂失所在。

後天欲雨、此物輒來。女亦知其當來、便出望之。蛟子亦出（出字原闕。據陳校本補。）頭望母、良久復去。

經年、此女亡後、三蛟一時俱至墓所哭泣、經日乃去。聞其哭聲、狀如狗嗥。（出『續搜神記』）

〔訓読〕

長沙に人の姓名を忘るる有り、江辺に家す。女の渚に下りて衣を漉ふ有り、身中に異有るを覚ゆるも、後以て患ひと為さず。遂に妊身し、三物を生む。皆鰕魚の如し。女己の生む所なるを以て、甚だ之を憐れみ、澡盤水中に著けて養ふ。

三月を経、此の物遂に大なり。乃ち是蛟子なり。各おの字有り、大なる者を当洪と為し、次なる者を破阻と名づけ、小なる者を撲岸と曰ふ。天暴かに雨ふり、三蛟一時に俱に去り、遂に在る所を失ふ。

後天雨ふらんと欲せば、此の物輒ち來たる。女も亦た其の當に來たるべきを知り、便ち出でて之を望む。蛟子も亦た頭を出だして母を望み、良久しくして復た去る。

年を経、此の女亡し後、三蛟一時に俱に墓所に至りて哭泣し、日を経て乃ち去る。其の哭声を聞くに、狀狗の嗥ゆるが如し。

〔語注〕

○長沙 湖南省長沙市。洞庭湖の南東、湘江の右岸。○鰕魚 エビ。また山椒魚のこと。『爾雅』「積魚」に「鮓、大者謂之鰕。」

（鮓、大なる者は之を鰕と謂ふ。）とあり、郭璞注に「今鮓魚似鮓四脚。前似獼猴、後似狗、聲如小兒啼。大者長八九尺。」（今鮓魚 鮓に似て四脚あり。前は獼猴に似、後は狗に似、声は小兒の啼くが如し。大なる者は長八九尺。）とある。○『續搜神記』「搜神後記」のこと。十卷。晋・陶淵明（三六五〜四二七）撰とされる。十卷。この書が陶淵明撰とされるのは「桃花源記」が収録されているからと思われるが、恐らくは偽託。この話は『搜神後記』巻十に収められている。

〔訳文〕

長沙の川辺に名前が伝わらない人が住んでいた。その女性が岸辺に下りて衣服を洗っていた際に身体に異常を感じたが、その後は気にしないでいた。そうして身ごもり、エビのようなものを三匹生んだ。女性は自分が産んだものであるから、これらをととても慈しみ、盥の水の中に入れて育てていた。

三ヶ月経つと、これらの物は大きくなった。なんと蛟の子なのであった。それぞれ一番大きいものを「当洪」（大水にぶち当たる）、二番目を「破阻」（邪魔物を破壊する）、一番小さいものを「撲岸」（岸に打ちつける）と名付けた。急に雨が降り出し、蛟は三匹とも一緒にどこかに行き、そのままどこにいるか分からなくなった。

その後雨が降りそうになるたびに、この蛟達はやって来た。女性も蛟達がきつと来るときを察知し、すぐに外に出て眺めやった。蛟も頭を出して母の方を遠望し、しばらくすると去つ

て行くのだった。

一年後、この女性が亡くなると、蛟は三匹とも一緒に彼女の墓にやって来て声を上げて泣き、丸一日経ってやっと帰って行った。その泣き声は犬が吠えているかのようであった。

○88 「蘇頌」

〔本文〕

唐蘇頌始爲烏程尉。暇日、曾與同寮汎舟沿溪。醉後諷詠、因至道磯寺。寺前是書溪最深處、此水深不可測。中有蛟螭、代爲人患。頌乘醉步行、還自駱駝橋。遇橋壞墮水、直至潭底。水中有令人扶尚書出、遂冉冉至水上。頌遂得濟。（出『廣異記』）

〔訓読〕

唐の蘇頌 始めて烏程の尉と爲る。暇日、曾て同寮と舟を汎かべて溪に沿ふ。酔後諷詠し、因りて道磯寺に至る。寺前は是書溪の最も深き処にして、此の水深きこと測るべからず。中に蛟螭有り、代よ人の患ひと爲る。頌酔ひに乗じて歩行し、還るに駱駝橋よりす。橋の壞るるに遇ひて水に墮ち、直ちに潭底に至る。水中に人をして尚書を扶けて出ださしむる有り、遂に冉冉として水上に至る。頌遂に濟はるるを得。

〔語注〕

○蘇頌 六七〇～七二七。唐の詩人。京兆武功の人。字は廷碩。開元四年（七一六）に宰相となり、賢宰相と謳われた。父の魂の跡を継いで許国公に封ぜられた。『旧唐書』卷八十八、『新唐

書』卷一百二十五に伝がある。○烏程 現在の浙江省湖州市。

○道磯寺 未詳。○書溪 浙江省天目山から流れ出し、烏程を通過して太湖に注ぐ川。『太平寰宇記』卷九十四「江南道・湖州・烏程県」に「書溪、在縣東南一里。凡四水合爲一溪。自浮玉山曰苕溪、自銅峴山曰前溪、自天目山曰餘不溪、自德清縣前北流至州南興國寺前曰書溪。」（書溪は、県の東南一里に在り。凡そ四水合して一溪と爲る。浮玉山よりするを苕溪と曰ひ、銅峴山よりするを前溪と曰ひ、天目山よりするを余不溪と曰ひ、德清県前より北流して州南の興國寺の前に至るを書溪と曰ふ。）とある。○駱駝橋 橋の名。書溪に架かっていた。『太平寰宇記』卷九十四「江南道・湖州・烏程県」に「駱駝橋、唐垂拱元年造。以橋形似駱駝之背、故名之。：（中略）：在書溪上。」（駱駝橋、唐垂拱元年造る。橋の形の駱駝の背に似たるを以て、故に之に名づく。：（中略）：書溪の上に在り。）とある。○水中有令人扶尚書出「尚書」とは蘇頌のこと。蘇頌は礼部尚書に至っている。ただしこれが地の文ならば突然蘇頌のことを尚書と呼ぶのはおかしいので、脱文があるか。丁玉璋等主編『白話太平広記』（河北教育出版社一九九五年）は「蘇頌自付必死无疑。这时忽然听到有人说：『快把尚书大人扶出去！』と補って訳している。○『廣異記』 中唐の戴孚が編纂した伝奇集。顧況の「戴氏広異記序」によれば、もと二十卷あった。既に佚して伝わらないが、輯本が数種存在する。作者戴孚は至徳二年（七五七）に顧況とともに進士に及第し、校書郎を経て、

饒州（現在の江西省上饒市一帯）の録事參軍になり、五十七歳で没した。

〔訳文〕

唐の蘇頌が烏程の尉となつたばかりの頃、休日（に）役人仲間と谷川で船遊びをした。酔つ払つて詩を口ずさみつつ、道磯寺までやって来た。寺の前は書溪の一番深い所で、どれくらいか深さか分からない程だった。その中には蚊が住んでいて、代々人に害を与えていた。蘇頌は酔つた勢いで、駱駝橋のところから歩いて帰ることにした。すると橋のちょうど壊れているところに行き当たつて川に落ちてしまい、真つ直ぐ淵の底まで沈んでしまつた。すると水中に蘇頌を助け出させる者がいて、そのままゆつくり水面まで昇つていった。そうして蘇頌は助かつたのである。

○89 「鬪蚊」

〔本文〕

唐天寶末、歙州牛與蛟鬪。初水中蛟殺人及畜等甚衆。其牛因飲、爲蛟所繞、直入潭底水中、便爾相觸。數日牛出、潭水赤。時人謂爲蛟死。（出『廣異記』）

〔訓読〕

唐の天寶の末、歙州の牛と蛟と鬪ふ。初め水中の蛟人及び畜等を殺すこと甚だ衆し。其の牛飲むに因りて、蛟の繞る所と爲り、直ちに潭底の水中に入り、便爾として相触る。数日に

して牛出で、潭水赤し。時人謂ひて蛟死せりと爲す。

〔語注〕

○歙州 現在の安徽省歙県。○便爾 すなわち。「爾」は「然」に同じく、形容詞や副詞などの後に付く助字。○『廣異記』中唐の戴孚が編纂した伝奇集。顧況の「戴氏広異記序」によれば、もと二十卷あつた。既に佚して伝わらないが、輯本が数種存在する。作者戴孚は至徳二年（七五七）に顧況とともに進士に及第し、校書郎を経て、饒州（現在の江西省上饒市一帯）の録事參軍になり、五十七歳で没した。

〔訳文〕

唐の天寶年間（七四二―七五六）の末、歙州の牛が蛟と戦つた。最初、川の中の蛟が人や家畜を殺すことがしばしばあつた。牛が川の水を飲んでいると蛟に巻き付かれ、真つ直ぐ淵の底に引きずり込まれたが、すぐによつかり合ひになつた。数日経つて牛が浮かび出てくると、淵の水は真つ赤になつていた。時の人々は蛟が死んだのだと考えた。

○90 「洪氏女」

〔本文〕

歙州祁門縣蛟潭。俗傳武陵鄉有洪氏女、許嫁與鄱陽黎氏。將娶、吉日未定、蛟化爲男子。貌如其婿、具禮而娶去。

後月餘、黎氏始到、知爲蛟所娶、遂就蛟穴求之。於路逢其蛟化爲人、容貌殊麗。其婿心疑爲蛟、視、見蛟竊笑、遂殺之。果

復蛟形。

又前到蛟穴、見其妻。并一犬在妻之旁。乃取妻及犬以歸。始登船、而風雨暴至、木石飛騰。其妻及犬、皆化爲蛟而去。其壻爲惡風飄到餘姚、後數年歸焉。

其後道人許旌陽又斬蛟于此、仍以板窒其穴。今天清日朗、尚有彷彿見之。(出『歙州圖經』)

〔訓詁〕

歙州祁門県に蛟潭あり。俗に伝ふ 武陵郷に洪氏の女有り、許嫁して鄱陽の黎氏に与ふ。將に娶らんとし、吉日未だ定まらざるに、蛟化して男子と爲る。貌其の婿の如く、礼を具へて娶り去る。

後月余、黎氏始めて到り、蛟の娶る所と爲るを知り、遂に蛟の穴に就きて之を求む。路に於いて其の蛟の化して人と爲るに逢ひ、容貌殊に麗し。其の婿心に蛟爲るかと思ひ、視るに、蛟の窃かに笑ふを見、遂に之を殺す。果して蛟の形に復す。

又た前みて蛟の穴に至り、其の妻を見る。并びに一犬妻の旁に在り。乃ち妻及び犬を取りて以て帰る。始め船に登るに、而るに風雨暴かに至り、木石飛騰す。其の妻及び犬、皆化して蛟と爲りて去る。其の婿悪風の飄すところと爲りて余姚に到り、後數年にして帰る。

其の後道人許旌陽又た蛟を此に斬り、仍りて板を以て其の穴を窒ぐ。今天清く日朗らかなれば、尚ほ彷彿として之を見る有り。

〔語注〕

○歙州 現在の安徽省歙県。○祁門縣 現在の安徽省祁門県。
○武陵郷 未詳。武陵郡のことか。武陵郡は洞庭湖の西岸に在り、今の湖南省常德市の東。○鄱陽 鄱陽湖東岸の県名。現在の江西省鄱陽県。○餘姚 現在の浙江省余姚市附近。○道人許旌陽又斬蛟于此 許旌陽は晋の道士許遜(二三九—三〇一)のこと。字は敬之。道術を呉猛に学び、孝廉に挙げられる。官は旌陽令。後に官を辞して西山で修行した。寧康年間(三七三—三七五)の初め、眷属とともに昇天し、游帷觀に祀られたという。後世、淨妙道という道教教団の祖師とされた。許遜が蛟を斬ったという話は広く知られており、『十二真君伝』『許真君』(『太平広記』卷十四所引)などに記述があるだけでなく、後には『警世通言』卷四十「旌陽宮鉄樹鎮妖」等の白話小説の題材にもなっている。○歙州圖經 唐代に作られた地理書。「歙州」は現在の安徽省歙県。宋の羅願撰『新安志』序に「唐有『歙州圖經』、國朝太平興國中詔編『廣記』、往往摭取之。」(唐に『歙州圖經』有り、國朝太平興國中に詔ありて『廣記』を編し、往往にして之を摭取す。)とあり、唐代の撰であることはわかるが、撰者は未詳。『太平広記』には六話が採録されている。

〔訳文〕

歙州祁門県に蛟が住む潭がある。世に言われるところによると、武陵郷の洪氏の娘が鄱陽の黎氏と結婚の約束をしていた。いよいよ嫁ぐことになり、まだ吉日を定めていない内に、蛟が

婿そっくりの男性に姿を変えて、礼物を整えて娘を迎えて行ってしまった。

一月ほど経つてやつと黎氏がやって来て、娘が蛟に連れて行かれたのだと分かったので、蛟の巢穴に娘を探しに行った。道中、蛟が美しい人間に姿を変えて現れたが、婿が心中こいつは蛟ではないかと疑っていたところ、蛟がこっそり笑っているのを見て、そのまま殺した。果して蛟は正体を現した。

また歩みを進めて蛟の巢穴にたどり着くと、妻となるはずの女性がおり、犬が一匹妻の側にいた。そこで妻と犬を連れて帰ることにした。船に乗るとすぐに風や雨が急に起り、木や石が捲き上げられた。妻と犬はどちらも蛟に姿を変えていなくなってしまった。婿は暴風で余姚まで吹き流されてしまい、数年かかって帰ってきた。

その後、道士の許旌陽がここで蛟を斬り、そうして板でこの蛟の巢穴を塞いだ。今でも天が晴れ渡って日が明らかに輝いていれば、ぼんやりと見えることがある。

○91「洪貞」

〔本文〕

鷄籠山在婺源縣南九十五里。高一百六十丈、廻環一十五里九十步。形如鷄籠焉。

唐開元中、有蛟龍變爲道人。歛人洪貞以弟子之禮師之。道流將卜居、尋諸名山。到黃山、貞問此山何如。道流曰、「確而寒。」

次到飛布山、又問之。道流曰、「高而無輔。」到此山、又問之。道流曰、「此山宜葬。葬者可致侯王。不然、即出妖怪而已。」貞問其所以、而不之告。道流于室中寢。貞入、但見蛟龍。由是候睡覺而辭歸、道流遂入鄱陽而去。貞歸、遷其父於此山。後二年、鄱陽洪水大發、漂蕩數千家。

貞本好道、常焚香持念、頗有方術。居於祁南之廻玉鄉、鄉人遂稱其變現神通。將圖非望、潛署百官、州中豪傑皆應之。後州發兵就捕、獲數十人。而貞竟不知所在。(出「述異記」。陳校本作出「婺州圖經」)

〔訓詁〕

鷄籠山は婺源県の南九十五里に在り。高さ一百六十丈、廻環一十五里九十歩。形鷄籠の如し。

唐の開元中、蛟竜有り變じて道人と爲る。歛人洪貞弟子の礼を以て之を師とす。道流將に居をトせんとし、諸名山を尋ぬ。黃山に到り、貞此の山は何如と問ふ。道流曰く、「確くして寒し」と。次いで飛布山に到り、又た之に問ふ。道流曰く、「高くして輔無し」と。此の山に到り、又た之に問ふ。道流曰く、「此の山宜しく葬るべし。葬りし者は侯王を致すべし。然らずんば、即ち妖怪を出すのみ」と。貞其の所以を問ふも、之に告げず。道流室中に于いて寝ぬ。貞入れば、但だ蛟竜を見るのみ。是に由りて睡の覚むるを候ちて辞し帰り、道流遂に鄱陽に入りて去る。貞帰り、其の父を此の山に遷す。後二年、鄱陽洪水大いに發し、數千家を漂蕩す。

貞まこと 本より道を好み、常に香を焚き持念し、頗る方術有り。祁南の廻玉郷に居り、郷人遂に其の変現神通を称ふ。将に非望を囮らんとし、百官を潜署し、州中の豪傑皆之に応ず。後州兵を發して捕に就かしめ、数十人を獲。而るに貞竟に在る所を知らず。

〔語注〕

○鷄籠山 山名。現在の浙江省杭州市富陽区の北。『説史方輿紀要』卷八十四「江西」に「雞籠山 府西十里。其山盤旋聳秀、下枕大江。…(中略)…相近者又有釣磯山。」(鷄籠山 府の西十里。其の山盤旋聳秀にして、下大江に枕す。…(中略)…相近き者又た釣磯山有り。)とある。また杜光庭『洞天福地嶽瀆名山記』「七十二福地」(『正統道藏』洞玄部紀伝類)に「鷄籠山、在和州歷陽縣。」(鷄籠山、和州歷陽県に在り。)とあり、こちらであれば現在の安徽省馬鞍山市一带。○婺源縣 県名。現在の江西省婺源県の北西。○道人・道流 道を得た人。僧侶と道士の両義があるが、ここでは道士の意か。○歙 県名。現在の安徽省歙県。○洪貞 未詳。正史には見えない。○黄山 山名。現在の安徽省歙県の北西。古來仙境を思わせる景観で名高い。○確 土がかたいこと。○飛布山 山名。現在の安徽省歙県の北。水が布のように噴き出しているから言う。○妖怪 怪しげな出来事、事件。○鄱陽 鄱陽湖東岸の県名。現在の江西省鄱陽県。○持念 仏教用語で、正法を心に持して忘れないこと。○祁南之廻玉郷 「祁南」は祁陽に同じか。祁陽県は現

在の湖南省祁陽県の西。「廻玉郷」は未詳。○非望 身分不相応の望み。ここでは先の道士の予言を受けて、王侯となる望み。○署 部局を設けること。○『述異記』『述異記』には二種あり、一つは南朝齊の祖冲之の作。原書十巻はすでに散逸し、魯迅の『古小説鈎沈』に逸文九十則が収録されている。もう一つは梁の任昉の作だとされるが、恐らくは後人の仮託。全二巻で、増訂漢魏叢書・百子全書等に収められている。但しこの話はどちらにも収められておらず、また唐代を舞台にしているのが時代も合わない。○『婺州圖經』 未詳。婺州に関する地誌の類か。婺州は浙江省金華市を中心とする浙江省中部一帯の地域。

〔訳文〕

鷄籠山は婺源県の南九十五里(五三・一八一km)にある。高さは百六十丈(四九七m)、周囲十五里九十歩(約八・五三六km)。形は鳥かごのようである。

唐の開元年間(七一三―七四一)、蛟竜が道士に姿を変えた。歙の人洪貞は弟子の礼をとってこれに師事した。道士は古いで住居を建てる場所を定めようと、各地の名山を尋ね歩いた。黄山にたどり着き、洪貞がこの山はいかがですかと訊ねると、道士は「この山は地質が堅くて寒い。」と答えた。続いて飛布山にたどり着き、また訊ねると、道士は「この山は高くして周囲に助ける山が無い。」と答えた。この鷄籠山にたどり着き、また訊ねると、道士は「この山は墓を建てるのに宜しい。葬った者

は王侯となるであろう。そうでなかったなら妖異が起こるであろう。」と言った。貞が詛を訊ねても教えず、道士は部屋で寝てしまった。洪貞が部屋の中に入ってみると、中には蛟竜がいなかった。それで洪貞は道士が目を覚ますのを待つて別れを告げ、道士は鄱陽へと去った。洪貞は故郷へ帰り、父をこの鶏籠山に改葬した。二年後、鄱陽では大洪水が起り、数千もの家々が流された。

洪貞はもともと道を好み、いつも香を焚いて心に經典を念じており、様々な術が使えた。祁南の廻玉郷に住んでおり、村人達は彼の変幻自在な力を賞賛していた。洪貞が分不相応な望みを抱いて密かに様々な官職を定めると、州中の豪傑達が皆呼応した。後に州は兵を出して逮捕に乗り出し、数十人を捕らえた。しかし洪貞はとうとうどこにいるのか分からなかった。

○92 「老蛟」

〔本文〕

蘇州武丘寺山。世言吳王闔閭陵、有石穴。出于岩下、若嵌鑿状。中有水、深不可測。或言秦王鑿取劍之所。

唐永泰中、有少年經過。見一美女、在水中浴。問少年同戲否、因前牽拽。少年遂解衣而入、因溺死。數日、尸方浮出、而身盡乾枯。其下必是老蛟潛窟、媚人以吮血故也。其同行者述其状云。

〔出「通幽記」〕

〔訓読〕

蘇州に武丘寺山あり。世に言ふ、吳王闔閭の陵に、石穴有り。岩下より出で、嵌鑿の状の若し。中に水有り、深きこと測るべからず。或いは秦王の鑿ちて劍を取らんとするの所と言ふ。

唐の永泰中、少年の經過する有り。一美女の、水中に在りて浴するを見る。少年に同に戯るるや否やと問ひ、因りて前みて牽拽す。少年遂に衣を解きて入り、因りて溺死す。數日にして、尸方めて浮き出づるに、而るに身尽く乾枯す。其の下必ず是老蛟窟に潜み、人に媚びて以て血を吮ふが故なり。其の同に行く者其の状を述ぶと云ふ。

〔語注〕

○蘇州 現在の江蘇省東南部一帯。○武丘寺山 現在の江蘇省蘇州市の北にある虎丘山のこと。吳王闔閭が葬られたと言われる。「秦王鑿取劍之所」注に引く『吳地記』を参照。○吳王闔閭 闔閭は春秋戦国時代の吳の王。諱は光。家臣の孫武、伍子胥などの助けを得て吳を強国へと成長させたが、越王勾践に敗れて没した。子の夫差は父の恨みを晴らせという言葉を忘れないために、寝台に薪を並べて眠ったという「臥薪」の故事で知られる。闔閭の死については、『史記』吳太伯世家には「十九年夏、…（中略）…越因伐吳、敗之姑蘇、傷吳王闔廬指、軍却七里。吳王病傷而死。」（十九年夏、…（中略）…越因りて吳を伐ち、之を姑蘇に敗り、吳王闔廬の指を傷つけ、軍却くこと七里。吳王病傷して死す。）とあるだけで、墓についての

記載は無い。次項「秦王鑿取劍之所」注に引く『吳地記』を参照。○秦王鑿取劍之所 秦王は秦始皇帝のこと。陸広徴『吳地記』に「虎邱山、避唐太祖諱、改爲武邱山。又名海湧山。在吳縣西北九里二百步。闔閭葬此山中。發五郡之人作家。銅椁三重、水銀灌體、金銀爲坑。『史記』云、闔閭冢在吳縣閭門外。以十萬人治冢、取土臨湖。葬經三日、白虎踞其上。故名虎邱山。『吳越春秋』云、闔閭葬虎邱、十萬人治葬。經三日、金精化爲白虎、蹲其上。因號虎邱。秦始皇東巡至虎邱、求吳王寶劍、其虎當墳而踞。始皇以劍擊之不及、誤中于石。其虎西走二十五里忽失。：（中略）：劍無復獲、乃陷成池。故號劍池。池傍有石、可坐千人、號千人石。其山本晉司徒王珣與弟司空王璿之別墅。咸和二年、捨山宅爲東西二寺、立祠於山。」（虎邱山、唐太祖の諱を避け、改めて武邱山と爲す。又た海湧山と名づく。吳県の西北九里二百歩に在り。闔閭此の山中に葬らる。五郡の人を發して冢を作らしむ。銅椁三重、水銀もて体に灌ぎ、金銀もて坑を爲す。『史記』に云ふ、「闔閭の冢は吳県閭門の外に在り。十万人の人を以て冢を治めしめ、土を取りて湖に臨む。葬りて三日を経、白虎其の上に踞る。故に虎邱山と名づく」と。『吳越春秋』に云ふ、「闔閭虎邱に葬られ、十万人もて葬を治む。三日を経、金精化して白虎と爲り、其の上に蹲る。因りて虎邱と号す」と。秦始皇東巡して虎邱に至り、吳王の宝劍を求むるも、其の虎墳に当たりて踞る。始皇劍を以て之を撃つも及ばず、誤りて石に中る。其の虎西走すること二十五里にして

忽ち失ふ。：（中略）：劍復た獲る無く、乃ち陥ちて池と成る。故に劍池と号す。池の傍に石有り、千人を坐せしむべく、千人石と号す。其の山本 晉司徒王珣と弟司空王璿の別墅あり。咸和二年、山宅を捨して東西二寺と爲し、祠を山に立つ。）とあり、少なくとも唐代には闔閭の陵に副葬された宝劍を始皇帝が盜掘しようとして叶わず、その時穿った穴が池になったという伝承があったらしい。○『通幽記』 中唐・陳劭が編纂した小説集。『新唐書』藝文志は二巻、『崇文總目』は三巻とするが、既に佚して伝わらない。『太平広記』には二十七話が採録されている。

〔訳文〕

蘇州に武丘寺山という山がある。世間で言うところよれば、吳王闔閭の陵には石の穴がある。岩の下からはじまり、人が削り掘ったかのようにであった。その中には水が溜まっていて、どれくらいか深さは分からない。秦王が掘って劍を取ろうとしたところだとも言われている。

唐の永泰年間（七六五～七六六）、若者がここを通りかかるに遊ばないかと声をかけ、そして少年の所にやって来て引張っていった。若者はそこで衣を脱いで水に入り、溺れ死んでしまった。数日後、遺体がやっと浮かび出たが、身体はからからに乾いていた。この水の底にはきつと歳経た蚊が穴の中に隠れており、人を誑かして血を吸っているからであろう。若者に

同行していた者がその様子を伝えたという。

○93 「武休潭」

〔本文〕

王蜀先主時、脩斜谷閣道、鳳州衙將白（忘其名。）掌其事焉。至武休潭、見一婦人浮水而來。意其溺者、命僕夫鉤至岸濱。忽化爲大蛇、沒於潭中。白公以爲不祥、因而致疾。愚爲誦岑參「招北客賦」云、「瞿塘之東、下有千歲老蛟、化爲婦人。炫服靚粧、游於水濱。」白公聞之、方悟蛟也。厥疾尋瘳。

又内官宋愈昭、自言於柳州江岸、爲二三人所招、里民叫而止之。亦蛟也。岑賦所言、斯足爲證。（出「北夢瑣言」）

〔訓読〕

王蜀先主の時、斜谷の閣道を脩むるに、鳳州の衙將白其の事を掌る。武休潭に至り、一婦人の水に浮かびて来たるを見る。其れ溺者なりと意ひ、僕夫に命じて鉤もて岸濱に至らしむ。忽ち化して大蛇と爲り、潭中に没す。白公以て不祥と爲し、因りて疾を致す。愚爲に岑參「招北客賦」を誦して云ふ、「瞿塘の東、下に千歳の老蛟有り、化して婦人と爲る。炫服靚粧し、水濱に遊ぶ」と。白公之を聞き、方めて蛟と悟るなり。厥の疾尋いで瘳ゆ。

又た内官宋愈昭、自ら言ふ柳州の江岸に於いて、二三人の女の招く所と爲るも、里民叫びて之を止むと。亦た蛟なり。岑賦の言ふ所、斯証と爲すに足る。

〔語注〕

○王蜀 五代十国の一つ、前蜀（八九一―九二五）のこと。王を姓とするので、王蜀という。西川節度使王建が東川、山南西道、荆南の一部を確保、天祐四年（九〇七）の唐滅亡の折には檄を飛ばして諸勢力を糾合しようとしたが応ずる者無く、自ら帝位について国号を蜀とした。後主王衍の時、後唐莊宗に滅ぼされる。○先主 初代皇帝である王建（八四七―九一八、在位八四七―九一八）のこと。字は光圀。許州舞陽の人。若い頃は無頼の徒であったが、黄巢の乱が発生すると討伐軍に参加し軍功を上げた。その後、神策軍使、壁州刺史、永平軍節度使などを歴任、天復二年（九〇三）に蜀王に封ぜられた。天祐四年（九〇七）に唐が後梁に滅ぼされると、皇帝を称して国号を大蜀と定めた。『旧五代史』卷百三十六、『新五代史』卷六十三に伝がある。○斜谷 現在の陝西省眉県の西南。褒斜道の東口に当たる。○閣道 山中の険しい崖から崖へ渡した架け橋。棧道。○鳳州 現在の陝西省宝鸡市の南西部一帯、鳳県附近。○衙將 軍府中の武官。○武休潭 未詳。「武休」は褒斜道にあつた蜀へ連なる関所。『方輿勝覽』卷六十九「鳳州」に「武休、饒風關、鳳州之東、興元之西、褒斜谷在焉。谷口三山、翼然對峙、南曰褒、北曰斜。在唐爲驛路、所以通巴漢。」（武休、饒風關は、鳳州の東、興元の西、褒斜谷焉に在り。谷口の三山、翼然として對峙し、南を褒と曰ひ、北を斜と曰ふ。唐に在りて驛路と爲り、巴漢に通ずる所以。）とある。ここではその武休関の近

隣にあった淵の名か。○岑參招北客賦 岑參（七一五？～七七〇？）は盛唐の詩人。肅宗の時嘉州刺史となったので、岑嘉州とも呼ばれる。辺境の風物を詠った詩が多く、辺塞詩人として知られる。この話で「招北客賦」と言われているのは、岑參「招北客文」（『岑參集校注』巻五）に「瞿塘無底、淺處萬尺、啼猿哀哀、腸斷過客。復有千歲老蛟、能變其身、好飲人血。化爲婦人、炫服靚粧、游於水濱。」（瞿塘に底無く、浅き処も万尺、啼猿哀哀として、過客を腸断せしむ。復た千歳の老蛟有り、能く其の身を変じ、好みて人血を飲む。化して婦人と爲り、炫服靚粧して、水濱に遊ぶ。）とあるのを指す。○瞿塘 長江の上流、重慶市奉節県の東にある峡谷。巫峡、西陵峡とともに三峡の一つ。○内官 宦官のこと。○宋愈昭 宦官の名。新旧『五代史』には見えないが、『北夢瑣言』巻二十「頭皆不見」に「僞蜀主歸命時、内官宋愈昭將軍數員。」（僞蜀主歸命の時、内官宋愈昭軍を將ゐること數員。）とある。○柳州 現在の広西チワン族自治区柳州市一带。○『北夢瑣言』 宋の孫光憲の撰。もと三十巻であつたらしいが、現行本は二十巻。主として唐宋、五代の軼事を載せている。北夢の称は光憲が初め高季興に従つて荊州夢沢の北にいたのによつてゐる。この話は現行の二十巻には無く、民国の繆荃孫が補つた『北夢瑣言逸文』巻四に収められている。

〔訳文〕

前蜀の先主の時、斜谷の棧道を修理することになり、鳳州の

衙將白公がそれを担当することになった。武休潭まで来た時、婦人が一人川に浮かんでこちらに来るのが見えた。白公は溺れた人だと思い、召使いに命じて鉤で引つけて岸辺に引き上げさせた。すると突然大蛇に姿を変え、淵の中に沈んでいった。白公は不吉だと思い、病にかかつてしまった。私は白公のために岑參「招北客賦」の「瞿塘の東、その下には千歳の老蛟があり、婦人に姿を変える。目も眩まればかりに美しく装い、水辺で遊ぶ。」という一節を暗誦した。白公はそれを聞いて、やつとあの婦人は蛟であつたのだと悟つた。病はまもなく癒えた。

また宦官の宋愈昭が自ら言うには、柳州の岸辺で二、三人の女性に招かれたが、里の人が止めるのでやめたという。これも蛟である。岑參が賦で言つてゐることが十分にその証拠となる。

○94 「伐蛟」

〔本文〕

「月令」、「季秋伐蛟取鼃。」以明蛟可伐而龍不可觸也。蛟之爲物、不識其形狀。非有鱗鬣四足乎。或曰、蚪蜮蛟蜃、狀如蛇也。南僧說蛟之形、如馬蟻。即水蛭也。涎沫腥粘、掉尾纏人、而噬其血。

蜀人號爲馬絆蛇。頭如貓鼠、有一點白。漢州古城潭內馬絆蛇、往往害人。鄉里募勇者伐之。身塗藥、游泳於潭底。蛟乃躍于沙汨、蟠蜿力困。里人謹諫以助、竟斃之。（出『北夢瑣言』）

〔訓詁〕

「月令」に、「季秋 蛟を伐ち鼈を取る」と。以て蛟は伐つべきも鼈は触るべからざるを明らかにするなり。蛟の物為るや、其の形状を識らず。鱗鬣四足有るに非ずや。或るひと曰く、蚪蛟蛟蝮は、状蛇の如きなりと。南僧 蛟の形を説くに、馬蟻の如しと。即ち水蛭なり。涎沫 腥粘ありて、尾を掉り人に纏ひ、而して其の血を啗らふ。

蜀人号して馬絆蛇と為す。頭猫鼠の如く、一点の白有り。漢州の古城潭の内の馬絆蛇は、往往にして人を害す。郷里勇者を募りて之を伐たんとす。身に薬を塗り、潭底に游泳す。蛟乃ち沙汭に躍り、蟠蜿して力困す。里人謹諫して以て助け、竟に之を斃す。

〔語注〕

○月令 『礼記』の篇名。孟春から季冬に至るまでの十二ヶ月の天体、気象、公式の年中行事などについて記す。『礼記』「月令」篇「季夏」に「命漁師伐蛟取鼈、登龜取鼈。」（漁師に命じて蛟を伐ち鼈を取り、龜を登めて鼈を取らしむ。）とある。鄭玄注に「四者甲類、秋乃堅成。」（四者は甲類にして、秋乃ち堅成す。）とあり、蛟も甲羅がある生き物として捉えている。○鱗鬣 うろことひれ。「鬣」は魚や竜の頸の横にある小ひれ。○蚪蛟蛟蝮 「蚪」は神蛇の名。郭璞「江賦」〔「文選」卷十二〕に「倮蟠拂翼而掣耀、神蜈蚣蝮以沈遊。」（倮蟠翼を払ひて耀を掣き、神蜈蚣蝮として以て沈み遊ぶ。）とあり、李善注に「山

海經」曰、倮蟠、状如黄蛇、魚翼、出入有光。郭璞曰、音條容。

『説文』曰、蜈蚣、蛇屬也。許慎『淮南子』注曰、黑蜈蚣、神蜈蚣の如く、魚翼、出入するに光有り」と。郭璞曰く、「音条容」と。『説文』に曰く、「蜈蚣、蛇の属なり」と。許慎『淮南子』注に曰く、「黑蜈蚣は、神蜈蚣なり。神泉に潜む」と。蜈蚣は、行く貌なり。」とある。李善注に従えば蜈蚣は生き物の名ではなくうねうね進む様ということになるが、ここでは生き物の名と思われ。○水蛭 ヒルのこと。水中にいて、人の血を吸う。○涎沫 「涎」も「沫」もよだれのような、粘り気のある液体。○馬絆蛇 蛟の別名。『埤雅』卷一「蛟」に「蛟、龍屬也。其状似蛇而四足細頸。頸有白嬰。大者數圍、卵生眉交、故謂之蛟。亦蛟能交首尾束物焉。故謂之蛟也。俗呼馬絆、以其如此。」（蛟、竜の属なり。其の状、蛇に似て四足細頸。頸に白嬰有り。大なる者は數圍、卵生眉交、故に之を蛟と謂ふ。亦た蛟能く首尾を交へて物を束ぬ。故に之を蛟と謂ふなり。俗に馬絆と呼ぶは、其の此の如きを以てす。）とある。○猫鼠 未詳。ネコやネズミのような動物の名か。○漢州 現在の四川省徳陽市一帶。○古城潭 未詳。淵の名か。○沙汭 「汭」は入り江のこと。入り江の砂浜のことか。○『北夢瑣言』 宋の孫光憲の撰。もと三十卷であったらしいが、現行本は二十卷。主として唐末、五代の軼事を載せている。北夢の称は光憲が初め高季興に従って荊州夢沢の北にいたのよって。この話は現行の二十卷に

は無く、民国の繆荃孫が補った『北夢瑣言逸文』巻四に収められている。

〔訳文〕

『礼記』「月令」に「九月に蛟と鼉を狩獵する。」とある。それによって蛟は狩ることができるとは触れてはならないことを明らかにしている。蛟というものがどのような形状をしているのか分からないが、鱗や鰭、四本の足があるものではないだろうか。ある人は、虯や蟻、蛟、蝮は蛇のような姿をしているという。南方の僧は蛟の形を馬蟻、つまりヒルのようだという。生臭い粘液があつて、尾を振つて人にまとわり付き、その血を吸う。

蜀の人々は蛟を「馬絆蛇」と呼ぶ。頭はネコやネズミのようで、白い点が一つある。漢州の古城潭の中の馬絆蛇はしばしば人に危害を加えていた。郷里では勇氣ある者を募つて退治することにした。応募した者の身体に薬を塗り、淵の底を泳がせた。蛟は砂浜に躍り上がり、くねくねとうねつて疲れ果てた。里の人々は大騒ぎで退治する人達を助け、とうとう馬絆蛇を倒した。

(了)

元原稿製作者・編集担当者

◎屋敷 信晴

項 青

○福本 陸美

西田 則子

山下 宣彦

山田 尚子

平山 千加子

寺岡 真佐子

(○は編集担当者、◎は編集責任者)